未来へ羽ばたく！＜ニューキャッスル・アポン・タイン大学短期留学中に＞

讃樹會

平成21年９月１日発行

CONTENTS

02　同窓生教授就任挨拶
06　退官教授挨拶
07　新任教授就任挨拶
09　会長選挙･理事選挙告示
10　20年度会計報告／21年度予算
11　理事会議事録
13　研究助成金･奨励金選考結果
13　国外留学助成金選考結果
14　国外留学助成金研究レポート
16　学生の国際交流助成－短期留学報告
20　研修医協力事業報告―研修医発表会他
22　Series教授の横顔
28　懇親会だより＋関東支部会開催案内
30　近況報告　山田勇／根間洋明
33　PHOTO「24期生巣立ちの日」
34　ルポ「新入生歓迎行事を終えて」
36　ニュースの窓
43　求人募集／事務局からのお知らせ
44　診療科だより

発行　香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-1
Tel/Fax　087-840-2291
E-mail　dousou@med.kagawa-u.ac.jp
http://www.kms.ac.jp/~dousou/
発行人　髙橋　則尋
編集人　大森　浩二
印刷所　㈱美巧社

同窓生教授就任挨拶

就任挨拶

香川大学医学部　医療情報部
教授　**横井英人**（平成８年卒）

この度、６月１日付で医学部附属病院　医療情報部　教授を拝命しました横井英人です。同窓会の皆様にここに紙面をお借りしてご挨拶を申し上げます。

私は、平成８年に香川医科大学を卒業し、千葉大学病院及び関連病院にて４年の臨床業務（主として消化器内科）従事の後、千葉大学の医療情報部にて医療情報を学びました。

当時、香川医大には医療情報学の大学院がなかったので、大学院のある千葉大学に移りました。２年の初期研修を終えてすぐに情報の大学院に入るつもりでしたが、２年で身につく臨床の知識・手技は十分ではなく、もう少し、もう少し、と２年延長したところで、教授の任期があと４年なので、大学院入学はもうそれ以上待てない、と呼び戻されました。千葉大学の医療情報部の里村洋一教授（当時）は、種々の先進的な医療情報システムの構築に関わっており、同研究室は気鋭の研究者達を何人も輩出しております。この研究室で私は、医療情報の基礎と共に、里村教授が主たるテーマとしていた、医療情報分野に於ける標準化と医療用語集の確立について学びました。

現在私は、医療画像の標準規格DICOM（Digital Imaging and COmmunications in Medicine）などの策定委員をしながら、国際的に有用な標準、日本自身が使いやすい標準はどういうものか、検討を行っております。この仕事は苦労の割に業績とならず、大変つらい作業なのですが、私の努力が先生方のお仕事の中のどこかで役立つように祈りながら頑張っております。

大学病院の医師は臨床・研究・教育の任を担っておりますが、私も同様に、病院業務（電子カルテの設計・開発・管理・運用）・研究・教育の三つの業務を行っております。

私は、大学教員は、自ら優れた業績を残すだけでなく、優れた業績を残す次世代を育てることも期待されていると考えております。そこで私が特に力を入れているのが教育です。私が香川に戻った次の年から、課題実習（３年次２月～３月１ヶ月間の研究室での実習）を開講したところ、コンスタントに学生が来てくれ、医療情報と医療情報の研究室にとても興味・親しみを持ってくれました。それに応えるべく、種々の用務で頻回に海外に出るものの、出張先から講義やゼミを学生に行うことで充実した指導ができるよう心がけています。このような指導を受けた中から将来の医療情報を背負ってくれる人が出てくれればよいなと期待しています。

コンピュータはツールです。その仕組みは大変精密で複雑ですが、あくまで一つの道具です。ただし、この道具は、我々の日常のみならず、世界全体の構造を変えるほどの可能性を秘めた道具です。実習の中では、コンピュータの便利さのみならず、その無限大の可能性、仕組みの奥深さ、そしてその使い方を誤ると大きな問題を招くであろう危険性をも、教えようとしています。

コンピュータは医学・医療のあり方も変えてきています。院内の電子カルテに始まり、生涯電子カルテ、遠隔医療など、その範囲はますます広がっています。しかし、どんなシステム・機械にも限界はあるし、危険性があります。そういう点を心配に思い、積極的に活用できないと考えられる方もいます。しかし、医療行為自体も限界・危険性はあります。現在ある問題を解決するための方策としてシステムを導入するとしても、全ての問題が一度に解決するとは限りません。また導入することで新たな問題が発生する可能性もあります。これは、疾患と治療行為の関係と全く同じです。先生方にはシステムの導入に関してのメリット・デメリットを十分に勘案して、医療全体に対してのストラテジーを考えた上でシステム導入の可否をご検討頂きたいと存じます。

香川大学医学部附属病院は開設当時から、積極的な情報化に取り組んできており、その到達度は全国的に見ても高いところにあります。このような環境を今後も維持し、香川から世界に向けて優れたシステムの構想を研究・発信していきたいと考えております。同窓生の先生方には変わらぬご支援を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成８年３月　香川医科大学医学部医学科卒業
平成８年５月　千葉大学医学部附属病院第一内科医員（研修医）
平成９年４月　栃木県厚生連塩谷総合病院消化器内科医師
平成12年４月　千葉大学医学部附属病院医療情報部医員
平成15年６月　国立医薬品食品衛生研究所医薬品医療機器審査センター
平成16年４月　独立行政法人医薬品医療機器総合機構
平成17年１月　香川大学医学部附属病院　医療情報部　講師
平成21年６月　香川大学医学部附属病院　医療情報部　教授

沖縄だより

琉球大学医学部　形態機能医科学講座
生理学第一分野
教授　松下正之（平成３年卒）

このたび、本年６月１日付けをもちまして、琉球大学医学部生理学第一分野教授に就任いたしました。この場をお借りして、皆様に一言ご挨拶をさせていただきます。

香川医科大学の学生時代は、バドミントンのクラブ活動に明け暮れていて、学業の面からは、あまり褒められた学生ではありませんでした。まさか自分が基礎研究者になるとは考えていませんでした。大学を卒業して精神神経科の大学院に入学し、統合失調症などの研究をしたいと希望していたのですが、人生、自分の意志とは関係なく違う道に進んでいくものです。大学院の時に、基礎実験手技を習得するために生理学第一講座に修行に出されていました。基礎研究をするうちに研究が面白くなり、いつの間にかカナダのカルガリー大学に交換留学生として半年ほど留学することになり、足を洗うことができなくなりました。大学院卒業後は、岡山大学医学部生理学第一講座に採用して頂きました。その後、ロックフェラー大学に留学しニューヨークで研究生活を満喫しました。留学していた研究室主催者のポールグリーンガード教授は、2000年にノーベル医学・生理学賞を受賞したので、世界の最先端の研究室を経験することができ、研究者として貴重な経験になりました。岡山大学に帰任後は、教授の指導と自由な研究環境で多彩な人材が集まっていたため、価値のある論文を発表することができ、現在の研究基盤ができたと思います。

これまでの研究活動で、自分の行いたい研究のアイデアが膨らみ、その研究を行える資金、環境を手に入れるために三菱化学生命科学研究所に応募し、採用されました。これで、私の夢が叶う環境が手に入ったと思い研究活動に邁進していたら、いきなり研究所を解散すると宣言されてしまいました。私は、のんびりした性格だと思うのですが、さすがにこの時は青天の霹靂で、研究生活も終わりかな？と思いました。まさに、自分の意思とは関係なく物事がすすみます。研究所の所長より、「研究所の解散は、当事者にとっては大変なことだけれど、あの時研究所が解散したからこそ、今の自分があると思えるよう頑張ってください」との前向きな言葉を頂き、就職活動を始めました。就職活動（私の場合は教授選考）では、これまでご指導いただいた先生方、同窓の先生方、同僚などに言葉に尽くせぬほどお世話になりました。幸運にも、琉球大学医学部生理学第一講座の教授に採用していただくことができました。改めて振り返ってみると、当たり前かもしれませんが、人との出会いが自分の人生を決めていくのだと痛感しています。

沖縄に教授選考の面接で来たときに、空気感が懐かしくて、この土地で教育・研究活動ができれば幸せだろうと思っていました。着任して、ほぼ一ヵ月経ちますが高知の足摺生まれの私には、気候も快適で故郷に帰ったような感じがして、しっくりきています。東京から沖縄は２時間～３時間の飛行時間で、那覇空港から首里までモノレールがあるので、距離は遠いのですが、時間はそれほどかかりません。那覇市近郊には70～80万人が住み、現在も人口が増えているようですし、ホテル、観光施設、マンションの建築ラッシュでバブルのようです。那覇市は大都会で、東京での生活と変わらない生活ができます。また、Life Scienceの研究者の立場からは、日本の大学とは異質な沖縄科学技術大学院大学が建設中で、この大学院大学が軌道に乗れば沖縄はシンガポールなどに変わり、立地的にもアジアのライフサイエンスの中心になれる基盤が整うのではないかと思っています。沖縄の研究環境も巨大な研究機関ができるわけですから変わってくると思っています。

琉球大学医学部は香川医科大学とほぼ同時期に開学しています。医学部は丘の上にあり、研究室の私の部屋から沖縄の青い海、空が見えます。大学の建物自体は、わが母校より立派なようです。学部内にはガジュマルの木が茂り、南国の雰囲気を醸し出しています。民間の研究所から大学に戻ると、学部学生、大学院生などがいるため活気に満ち溢れています。今後は、琉球大学医学部の学生を教育指導していく立場になりましたが、社会福祉に貢献できる人材を育てなければならないと考えています。また、研究者の立場からは、私の研究に興味を持ち、ともに研究活動を行い、私の研究を引き継いでくれる人材を一人でも多く育てられるように頑張りたいと思っています。

沖縄は観光地として有名なので、学会のみならず、観光でお越しの際にも、ぜひお声をかけて下さい（masayuki@med.u-ryukyu.ac.jp）。

最後になりますが、香川で医学を学んだ同窓の皆様のご活躍をお祈りします。

略歴

平成３年３月	香川医科大学医学部卒業
平成３年４月	香川医科大学大学院医学研究科精神神経医学専攻入学
平成７年６月	香川医科大学大学院医学研究科精神神経医学専攻修了
平成７年８月	岡山大学医学部生理学第一講座　助手
平成７年８月	ロックフェラー大学ポールグリーンガード研究室研究員
平成９年12月	同上辞職
平成10年１月	岡山大学医学部生理学第一講座　助手帰任
平成15年６月	岡山大学大学院医歯学総合研究科細胞生理学講座講師
平成17年９月	同上辞職
平成17年10月	三菱化学生命科学研究所　グループリーダー
平成18年４月	東京医科歯科大学　客員教授（兼任）
平成21年５月	三菱化学生命科学研究所　辞職
平成21年６月	三菱化学生命科学研究所連携研究員（兼任）
平成21年６月	琉球大学医学部形態機能医科学講座生理学第一分野教授

教授就任にあたって
－10年後に向けて日々研鑽を積む－

東京女子医科大学医学部　法医学講座
教授　木林和彦（昭和62年卒）

平成20年１月１日付で東京女子医科大学に赴任しましたことをご報告申し上げます。私は昭和62年に香川医科大学を卒業後、同大学の恩師 恒成茂行 教授（現. 熊本大学名誉教授）の異動に伴い、熊本大学で大学院生、研究員及び助手として14年間法医学を学び、平成12年から佐賀大学で法医学教授を担当させて頂いていました。佐賀大学での７年半の間、私ながら地道に職務に取り組みました。関東は初めての生活と仕事の場でありますが、今から10年後に「あの時に異動して良かった」と言えるよう、都心の新宿で目標に向けて日々研鑽を積んでおります。

本学では前任地と同様に「人々に役立つ法医学の実践」を目標とした教室運営に取組んでいます。法医学には教育と研究に加えて実務があります。法医学教室の実務活動は大学の地域社会への貢献として大切なものです。私は、法医学実務を積極的に行い、患者さんとご家族並びに司法・医療関係者に役立つことを第一としています。教育機関としては、実務と教育を結び付け、法医学実務から得られた知見を臨床の場で生かして頂ける教育活動を目指しています。

研究では法医神経病理学の専門研究機関としての教室を目標としています。法医神経病理学は法医解剖例の脳の検査を行う法医病理学の一分野ですが、頭部外傷の受傷機転や損傷と疾患の因果関係の解釈では裁判において論争となることがあり、専門的な知識と経験が必要です。これまで頭部外傷による神経細胞変性、エイズと薬物乱用の神経病変、高齢者の事故と認知症との関係、熱中症の脳病態に関する研究を行ってきました。日常の法医学実務の中から十分に研究されていない重要な課題を見出し、基本的な実験手法を用いて、動物実験などで検証する方法で研究を進めて頂いています。

今後、多くの方々から信頼され、関係機関と研究者から選ばれる教室にしたいと思います。幸い全国の大学等から優秀な方々に当教室に教員として来て頂いています。法医学を担当する教員の育成は全国的に急務の課題です。医学部卒業生が法医学を専攻したいと思うような魅力ある教室作りが必要です。

同窓会関東支部の諸先生には赴任直後から公私ともにお世話になっています。同窓会会員各位には今後とも益々のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

香川県高松市出身
昭和62年３月　香川医科大学医学部卒業
平成３年３月　熊本大学大学院医学研究科修了
平成３年３月　熊本大学医学部法医学教室医員
平成４年４月　熊本大学医学部法医学教室助手
平成12年４月　佐賀医科大学（現. 佐賀大学医学部）法医学教授
平成20年１月　東京女子医科大学医学部法医学講座教授
現在に至る

川崎医科大学に赴任して

川崎医科大学　生理学２教室
教授　宮本　修（平成元年卒）

この度、平成21年１月１日付けをもちまして、川崎医科大学生理学２教室に赴任いたしました４期生の宮本修です。平成５年に第一生理学教室で学位を取得した後、長く香川大学に在職しておりましたが、平成18年4月に倉敷芸術科学大学に移りました。その後、３年弱で川崎医大に異動することになりましたが、再度医学部で仕事ができる喜びを感じているところです。ただ、医学部ではすでにCBTやOSCEが導入され、コアカリに沿った授業構成など、赴任当初は新しい環境に戸惑うことも多々ありました。赴任して６ヶ月が経ち、やっと研究の時間を取れ始めたところです。

ご存じの方も多いかと思いますが、川崎学園は1970年に川崎祐宣先生が創設し、その中核として川崎医大があります。ここには全国でも珍しい付属高校が併設され、医師になるためのいわば９年一貫教育を実施しています。さらに、ユニークな医学教育博物館があり、医学教育に関連した資料や設備が展示・所蔵されています。これらのことからもお分かりになると思いますが、学園・教職員の教育に対する熱意や教育設備の充実には目を見張るものがあります。例えば、１年生は全寮制で、学業や生活に何か異常を見つけるとすぐに担当教員が対応しますし、３学期制による各学期の中間・期末試験と年度末の総合試験の実施（もちろん国試形式）や教材教具センターの設置などです。この教材教具センターでは専門の職員が授業で使用するスライドやビデオ、模擬試験問題などの作成を行っています。このような医学教育に関する姿勢は、香川大学でも参考にする点も多いかもしれません。また、今年度から新カリキュラムになり、１年生から「構造と機能」として解剖、生理が始まり、完全な臓器別講義となります。専門科目の前倒しは良い面ももちろんありますが、学生にとっては1年次から勉強に追われますし、我々教員にとっても、それぞれの担当科目を系統的な学問として教えることがますます困難になっています。私の担当科目である生理学についても、そのおもしろさをどのようにして学生に伝えるか、日々試行錯誤を繰り返しながら授業に臨んでおります。前川崎医科大学学長の植木宏明先生が、「臨床も、教育も、研究も、同じもの」と言っておられます。現状を丁寧に観察して問題点を抽出・分析し、それぞれに対する解決策を見いだしていく過程はまさに同じですし、教育と研究に全力を尽くすことが私ども基礎医学教室の役目であり、ひいては社会への貢献につながることだと思っています。

昨今は医師不足がたびたびマスコミの話題に上っていますが、基礎医学の分野では臨床以上に状況は深刻で、医学部出身者はすでに絶滅危惧種に指定されています。私の教室も例外ではなく、私以外のスタッフは全員他学部の出身者です。私は、医科大学における基礎医学教室の研究は、疾患の病態生理の解明や治療法の開発など、臨床に結びつくものでなければならないと考えております。その点からも医学部卒業の若い人に教室へぜひ来てもらいたいと思っています。また、臨床医になるにしても、若い時期の一定期間にしっかりと研究する環境に身を置いて研究漬けの生活を送ることは、将来必ず臨床の場でも役立つことと考えています。私自身も今回川崎医大に赴任できたのは、大学院時代に板野俊文先生を始め、旧第一生理学教室の先生方に研究の基礎を指導していただいたおかげだと感謝しております。

最近は共同研究を口実にして、たびたび香川大学に人材捜しに行っておりますが、できるだけ早く教室の陣容を整えて、香川大学が讃岐の丘から世界に発信しているように、川崎医大のあるここ松島の地からも世界に発信できるような研究や人材育成を目指したいと思います。同窓会の皆さんはそれぞれの赴任先で一所懸命に職務に励んでおられることと思いますが、私も川崎医大でしっかりと根を張って、香川の卒業生の一人として恥ずかしくないような仕事をしていきたいと思っております。今後とも讃樹會会員の皆様のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

平成元年３月　香川医科大学医学部卒業
平成５年３月　香川医科大学大学院医学研究科（生理学）修了
平成５年８月　香川医科大学助手（保健体育）
平成６年４月　カルガリー大学医学部研究員（神経病理学）
平成７年10月　香川医科大学助手（生物学）
平成14年10月　香川医科大学助教授（脳神経生物学）
平成18年４月　倉敷芸術科学大学生命科学部教授
平成21年１月　川崎医科大学教授（生理学２）

退官教授挨拶

香川大学名誉教授
（前医学部附属病院医療情報部教授）
原　量宏

香川医科大学が、全国国立大学最後の医科大学として開設される1980年に着任して、すでに29年が経過しました。当時、香川県の周産期死亡率は、常に全国のワースト５にリストされる状況でした。そのこともあり、香川医大では従来の伝統的な産婦人科学講座ではなく、周産期医学を中心とする新しい概念のもとに母子科学講座、そしてその臨床のフィールドとしての母子センターを立ち上げることになりました。内定の段階から、産婦人科外来、病棟、そして母子センターの設計に関与できたことは、なかなか経験できないことで、その後新しいプロジェクトを立ち上げる場合に大変役立ちました。

香川県をモデルとした、人口100万人に一か所の割合で総合周産期母子医療センターを配置する計画は、厚生労働省により周産期医療のシステム化プロジェクトとして積極的に進められ、現在全国ほぼすべての都道府県に設置されたことは、大変やりがいがあったと感じています。母子科学講座在任中は、神保教授、半藤教授二人の助教授として、教育、研究、臨床に全力を尽くせたことを、ここに改めて感謝いたします。また、母子センターでは、当時の新任の看護師長、助産師、看護師の方々とも、大変楽しく勤務させていただいたことも素晴らしい思い出です。最近産婦人科医は大変厳しい職場といわれ、希望者が年々減少の一途の様ですが、私にとっては本当にやりがいのある職種で、もう一度生まれ変わることができたら、迷わずまた産婦人科医になると思います

研究分野では、香川県の医療機関と妊婦さんを対象として、ネットワーク対応のWeb版周産期電子カルテと、胎児心拍数を伝送する在宅妊婦管理システムの開発に取り組みましたが、日本産婦人科医会と経済産業省プロジェクトとして、現在全国に展開することができましたのも皆様のご支援と感謝しております。

2000年に医療情報部に異動してからは、電子カルテの導入、そして放射線部、検査部などの、画像システムや検査機器と電子カルテの連携、フィルムレス化が大きな仕事でした。電子カルテの導入にあたっては、各診療科には大変なご負担をおかけしましたが、現在本学附属病院では、医師はもちろん、薬剤師、看護師、放射線技師、検査技師など、すべての職種の方々に利用されるようになり、心から感謝しております。また研修医用の電子カルテ端末を増備していただき、研修医はもちろん医学科、看護学科の学生教育にも大変役立っています。

院外では、かがわ遠隔医療ネットワーク（K-MIX）の構築に携わってきました。当初参加医療機関は30施設程度でしたが、その後参加医療機関は年々増加し、現在82施設に至っております。幸いなことにK-MIXは全国から注目され、県外の医療機関も11施設が参加し、経営的にもどうにか自立できるところにまできています。K-MIXの機能は年々増強され、ＣＴやＭＲＩの画像伝送だけでなく、紹介状などの診療情報にくわえ、動画、心電図はもちろん、脳卒中地域連携パス機能を実装するなど、あらゆる医療情報の伝送が可能になっています。今後は、電子処方箋による医療機関と調剤薬局の直接の連携、糖尿病やＣ型肝炎の地域連携パス機能など、新しい取り組みが計画されており、同窓会の皆様には是非ともご利用いたたきたいと考えております。

４月からは、香川大学瀬戸内圏研究センター、ならびに徳島文理大学理工学部臨床工学科教授にお世話になりますが、これまで以上に遠隔医療と電子カルテネットワークの普及、そしていわゆる日本版ＥＨＲの実現に全力で取り組みたいと考えておりますので、皆様のご理解、ご支援よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、香川大学医学部と同窓会のますますの発展と、皆様のご健康を祈念して、退任のご挨拶といたします。

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって
－紆余曲折をへて、世のため人のため－

人間社会環境医学講座
公衆衛生学
教授　平尾智広

皆様はじめまして。本年６月１日付けをもち、公衆衛生学教室を担当させていただくことになりました。前任は本学医療管理学でしたから学内での異動となります。

最初にご報告ですが、本学の社会医学講座は、開学時より衛生・公衆衛生学として開設され、初代中島泰知教授、二代實成文彦教授のご尽力のもと、香川の地に確かな足跡を残してまいりましたが、今年４月の講座再編により、公衆衛生学と衛生学の二講座に分かれる事となりました。私は公衆衛生学の担当となりますが、先輩方の歴史を継承しながら、新たな香川大学のPublic Healthを展開したいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

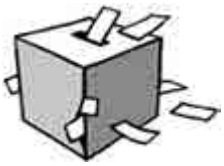
私はもともと香川をルーツに持つ人間で、学童期から高校卒業までを高松で過ごしました。昭和60年に北大を卒業後、天理よろづ相談所のレジデントを経て、北大第一外科で消化器外科を中心とする修練を積んでおりました。社会医学分野に転向するきっかけとなったのは、レジデント終了後に参加した東アフリカでの医療協力でした。わずか２ヶ月間の滞在でしたが、ケニア国内での巡廻診療の経験が、その後のライフコースに大きな影響を与えることになったのです。帰国後しばらくの間は、どこでも何でもできる医者を目指そうと青臭いことを考えていたのですが、途上国の背景にある政治、社会、経済的要因や、高度な医療が無くても予防できる疾病について考えるうちに、国際保健、公衆衛生とのめりこんで行きました。ついには医局を辞してハーバード公衆衛生学校に進み、終了後は国際機関で仕事をするつもりでいたのですが、悪運つきて大病を患い数年間の療養を強いられました。その間本学附属病院にもお世話に成りましたが、幸運にも健康を取り戻し、実家に近い香川医科大学の門をたたいたのが平成７年のことです。

大学院では中途で終わっていた公衆衛生学を学び直し、基礎となる疫学、生物統計学、人口学、行政学等を学ぶことができました。また機会があって国立医療病院管理研究所（現国立保健医療科学院）の研究員となり、病院管理、医療経済、医療政策について学び、その中で研究の成果が政策に反映され、国策として全国に普及して行く過程をみることができました。平成12年からは本学衛生・公衆衛生学助手、平成15年からは医療管理学准教授の職をいただき、医療の質、医療安全、疾病負担等の研究活動を行ってきましたが、当時はこの分野の研究者が珍しかったせいか、WHO本部のワーキングに参加する機会を得、現在につながる世界的な医療安全、医療の質の追求、医療技術評価ムーブメントの一助となることができたと考えております。またもともと国際協力を志向していたため、平成13年よりJICAの国際緊急援助隊医療チーム（JMTDR）の運営、派遣隊員の養成、教育に携わり、人道援助ミッションの評価事業（トルコ地震、イラク危機）を経験しました。

この度教授になる過程で、今までに自分の通ってきた道をじっくり振り返ることができたのですが、「実に様々なことをやってきた」というのが正直なところです。とにかく挫けずに自分の興味を追求しているうちに、すばらしい出会いがあり、不思議と機会に恵まれてここまで辿りつきました。公衆衛生といえば地味な印象をお持ちでしょうが、本来とても魅力的な分野です。大学にお越しの際は、是非研究棟７階をのぞいて見てください。

略歴

1985年３月　北海道大学医学部卒業
1985年５月　天理よろづ相談所病院レジデント
1987年７月　北海道大学医学部第一外科入局
1999年11月　国立医療･病院管理研究所研究員
2003年４月　香川大学医学部医療管理学､准教授
2009年６月より　現職



讃樹會　選挙告示

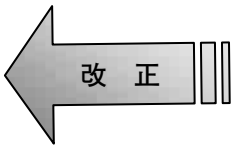
選挙管理委員会　委員長　田井祐爾

同窓会会長選挙

平成22年３月の任期満了に伴い同窓会会長の選挙告示を行います。
同窓会会長選挙規定をご確認の上立候補される会員の方は平成21年12月20日までに事務局までご連絡下さい。但し、立候補者一人の場合は信任となります。

注意：「選挙規定第７条　会長選挙の開票及び開票時の問題処理」が下記の通り改正されましたのでお知らせします。

~~1　投票用紙の開封は、総会において公開して行う。~~
「投票用紙の開封は、選挙管理委員会が総会開催までに公開で行う。」



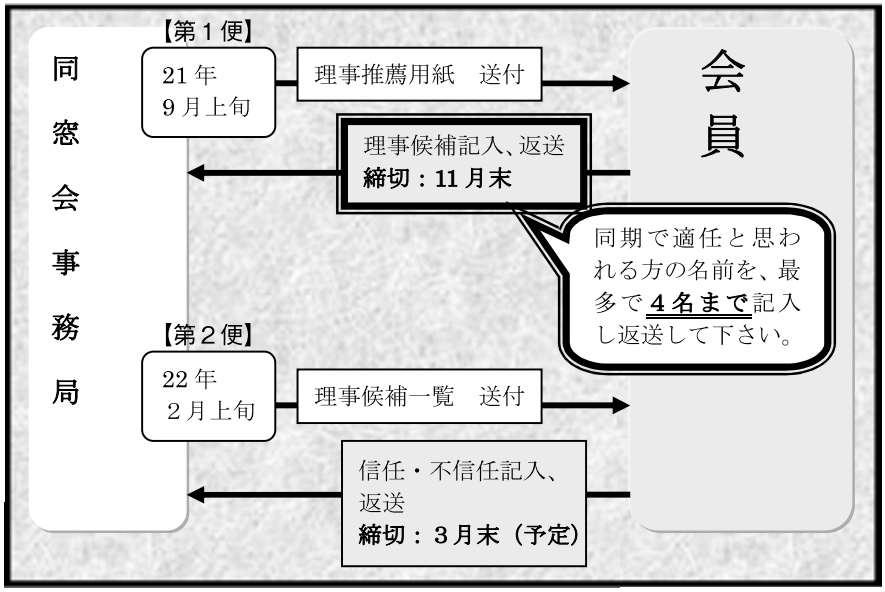
【補足説明】総会までに、選挙管理委員会が参加者の前で開票作業を行い、決定した新会長が開催宣言をすることとする。郵送分と、当日会場に持参分も併せて開票する。郵送しなかった人は、当日、会場で総会開催宣言前に投票する。

これまでは、総会において、会長選挙の開封作業を総会参加者で行うことが通例となっていたが、投票者が開票作業に関わるのはおかしいことと、総会の中途で進行を止めて行う開封作業のため迅速な議事進行に支障が出るという理由から、平成20年度第１回理事会（５月12日開催）で上記のように決定した。

同窓会理事選挙

現在の理事は、平成22年３月に任期満了となりますので、会則９条及び会則25条にもとづき、選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の推薦をお願いします。

◆理事選挙までの流れ◆



【第１便】
９月上旬を目途に、理事推薦用紙をお送りします。同期で適任と思われる方の名前を、最多で４名まで記入し11月末日までに返送してください。立候補もお待ちしています。
【第２便】
翌年の２月上旬に、みなさんからの推薦をまとめた理事候補一覧をお送りしますので、信任・不信任を記入の上、返送ください。

会則及び同窓会選挙規定は讃樹會ＨＰ「会則」を、今期の執行部及び理事名につきましては、同封の一覧又は讃樹會ＨＰ「同窓会役員名簿」を参照下さい。http://www.kms.ac.jp/~dousou/

平成20年度会計報告及び平成21年度予算

平成20年度収支報告書

平成20年4月1日から平成21年3月31日

事業活動収支の部　単位：円

科　目	予算	決算
1.事業活動収入		
①会費・入会金収入	6,250,000	11,105,000
②寄付金・広告収入	1,500,000	1,474,580
③委託手数料収入	165,000	165,497
④雑収入		53,766
事業活動収入計	7,915,000	12,798,843
2.事業活動支出		
① 事業費支出		
会報制作費	550,000	573,000
会員名簿編纂費	0	0
後援協賛事業費	500,000	472,547
支部・同期会費	500,000	431,570
学術助成金事業費	2,600,000	2,447,940
学生援助基金	1,000,000	550,317
研修医協力費	550,000	513,237
法人化調査費	200,000	0
事業費支出小計	5,900,000	4,988,611
②管理費支出		
事務人件費	2,000,000	1,940,300
事務局・各委員会運営費	1,000,000	966,832
事務局設備投資費	300,000	0
通信費	750,000	539,001
慶弔費	500,000	253,510
雑費	50,000	113,696
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000
予備費	1,000,000	0
管理費支出小計	5,700,000	3,913,339
事業活動支出計	11,600,000	8,901,950
当期事業活動収支差額	-3,685,000	3,896,893
前期繰越収支差額	22,929,534	22,929,534
次期繰越収支差額	19,244,534	26,826,427

平成21年度予算

事業活動収支の部　単位：円

科　目	予　算　額
1．事業活動収入	
②会費・入会金収入	8,670,000
③寄付金・広告収入	1,500,000
④委託手数料収入	417,359
⑤雑収入	
事業活動収入計	10,587,359
2．事業活動支出	
① 事業費支出	
会報制作費	600,000
後援協賛事業費	500,000
支部・同期会費	500,000
学術助成金事業費	2,600,000
学生援助基金	1,500,000
研修医協力費	550,000
事業促進費	500,000
木蓮会支援事業費	1,000,000
法人化調査費	200,000
事業費支出小計	7,950,000
②管理費支出	
事務人件費	2,000,000
事務局・各委員会運営費	1,000,000
事務局設備投資費	700,000
通信費	700,000
慶弔費	500,000
雑費	150,000
香川大学同窓会連合会費	100,000
予備費	1,000,000
管理費支出小計	6,150,000
事業活動支出計	14,100,000
当期事業活動収支差額	-3,512,641
前期繰越収支差額	26,826,427
次期繰越収支差額	23,313,786

貸　借　対　照　表

平成21年３月31日現在

単位：円

資産の部	金　額	負債及び正味財産の部	金　額
資産		負債	
１．流動資産	(30,065,267)	１．流動負債	(3,238,840)
現金・預金	26,826,427	保険料預かり金	3,238,840
保険料預かり預金	3,238,840		
		２．固定負債	(16,000,000)
２．固定資産	(16,051,902)	同窓会館建設引当金	16,000,000
同窓会館建設引当預金	16,000,000		
備品	51,902	正味財産	26,878,329
合　計	46,117,169	合　計	46,117,169

重要な会計方針

・固定資産の減価償却方法

　備品・・・・・定額法により実施している

財　産　目　録

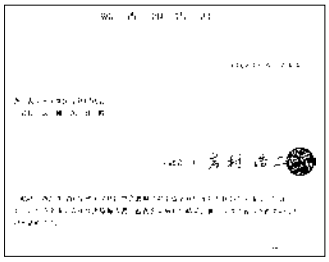
平成21年３月31日

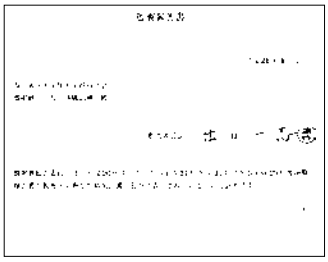
単位：円

資産の部				
１．流動資産				
（１）現金・預金				
イ）手許現金		15,563		
ロ）普通預金	百十四銀行三木支店	263,527		
ハ）郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	15,381,315		
ニ）定期預金	香川銀行本店営業部	10,125,567		
	百十四銀行医大前出張所	1,040,455		
（２）保険料預かり預金		3,238,840		
	流動資産合計		30,065,267	
２．固定資産				
（１）特定目的資産	同窓会館建設引当預金	16,000,000		
（２）有形固定資産				
備品	コピー機	10,801		
	パソコン	41,101		
	固定資産合計		16,051,902	
	資産合計			46,117,169

固定資産の内訳（平成21年３月31日現在）

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
デルＰＣ	1	11.04	219,870	定額	4	0.25	2,198	8,795
キャノンコピー	1	12.06	270,000	定額	5	0.2	2,699	10,801
富士通パソコン	2	14.03	529,600	定額	4	0.25	5,295	21,185
パソコン周辺機器	1	14.03	278,000	定額	4	0.25	2,779	11,121
			1,297,470				12,971	51,902





理事会議事録

平成21年度 第１回　開催:平成21年7月13日(月) 20：00～21：30

１．国外留学助成金の審査・決定

村尾学術局長から、21年度第1回国外留学助成金に横平政直先生の申請が報告された。国外留学助成金応募選考基準にのっとり参加理事全員による審査が行われた結果、金193,800円の助成が決定した。

２．研究助成金／奨励金審査・決定

村尾学術局長から選考過程について説明が行われた。研究助成金部門(受賞額100万円)では日下隆先生(香川大学医学部総合周産期母子医療センター)が、また研究奨励金部門(受賞額50万円)では中井浩三先生(香川大学医学部皮膚科)が、外部評価で第1位の点数を獲得した。外部評価委員の方の公正な審査結果をふまえて、それぞれの受賞について拍手をもって理事会で承認された。

また、執行部より、受賞者の受賞後の申請回数に制限を設けることが提案された。研究奨励金は、１回の受賞をもってその後の申請はできないこととする。また、研究助成金は、１回受賞した後はインターバルを３年置いて再度申請が出来る、という形にする旨が提案され、拍手をもって理事会で承認された。

３．20年度決算の承認

乾事業局長から20年度決算報告が行われ、併せて讃樹會理事会監査委員会の監査報告及び岩村会計士事務所の監査報告が資料として提示され、拍手をもって理事会で承認された。

４．21年度予算案の承認

乾事業局長から21年度の予算案が上程され、従来の予算項目に加え、今期の新たな事業案について説明された。

１)看護科同窓会支援について、清元会長代行から説明があった。

「看護科卒業生から、助産師の資格をとるための勉強を援助してくれるシステム等あれば香川大学に帰ってきて働きたいという希望も出ており、病院の看護師不足解消に資する意味でも、木蓮会で奨学金制度の立ち上げを進めたいが、そのための資金が不足しており讃樹會に原資を貸してほしい」という申し出が木蓮会からあった。支援事業の一環として予算化を希望する。

２)法人化調査費について、乾先生から説明があった。

20万円を予算化し、法人化によるメリットや法人化した上で適正に事業を行っていく方法などを調査して、法人化を進める。

３)国際交流推進事業としての予算化について、清元会長代行から説明及び国際交流委員長の徳田先生をお招きしてプレゼンが行われた。

清元先生から、同窓会は学生の国際交流支援を事業の一つとしており、すでにこちらから海外に行く学生に関しては一人当たり４万円の助成をしている。しかし、海外から来られた時に関しては、今は、国際交流委員会の手弁当でいろいろな事業がまかなわれている。双方向の国際交流がうまくいくために、こちら側と提携している教職員、学生等が来られた時に対して何かの基金を創設していただけないかという国際交流委員会からの要望があり、事業案として審議してほしい旨が説明された。

国際交流委員会委員長の徳田教授のプレゼンでは、国際交流活動が近年学生を中心に非常に活発化している現状が説明された後、その反面、華美にならないように努力していても、どうしても大学のどの経費からもカバーできないような経費が必要となるため、後進の学生たちのために同窓会から一定程度の援助を検討してほしいとの要請があった。

更に、清元先生から、金銭的に援助をもらっても海外へ留学できない学生もおり、むしろ向こうからきていただいて学生と交流していただければ、香川にいながら国際交流が出来るひとつの支援事業になるのではないかという意見が追加された。

それに関連して、ノベルティグッズ(同窓のネクタイ、マグカップなどのようなもの)を作って、国際交流の記念品として利用するようなことも事業の中に盛り込んではどうかという提案が清元先生から出された。

審議に移り、議長の横井理事長から、まず、基本的に提携大学との国際交流事業についての援助を讃樹會として何らかの形で行いたいかどうかの確認、次に、今のような実績の活動において大学からどうしてもサポートができない部分に対して讃樹會が一応基準を設けて援助する（具体的にはレセプション、親睦会及び何らかの物品に関しても援助を行う)という基本路線について、これでいいかどうか確認があり、拍手をもって理事の承諾があった。

具体的に、清元先生から、国際交流(留学助成)やACLSなどの在校生による従来の活動に対する支援額100万円に、新しく今回国際交流委員長徳田教授のプレゼンにより提案された国際交流への助成50万円を加えて学生援助基金とし、合計150万円という金額の提示があった。また、新たに事業促進費として50万円を予算化しノベルティグッズを作って、それを新たに提案されたような国際交流事業にも使うことが提案された。また、乾事業局長からも、予算案の資料について、学生援助基金を150万、事業促進費を50万円に修正するよう申し入れがあった。

次に横井理事長から、実際の国際交流事業は学生が殆ど実質主催になっており、学生がもてなしをするという意味でも新たな提案部分を含め学生援助基金に該当できること、また、事業促進費に関しては、国際交流とは分けて考えて、新しく学内向けのノベルティグッズを作った中から、せっかくなので来日された方にプレゼントしようとするものと理解する旨発言があった。

小川先生から、ノベルティグッズはどんどん作ってもらったらいいと思う、本学の方でも、興味本位ででも学生がどんどん買っているし、起爆剤にはならないかもしれないけど、売れる要素(新たな収入源)にはなるのではないかと思う、との賛成意見が出された。

清元先生から、大学のロゴや医学部のロゴの使用については、まず許可をとる必要があることが付け加えられた。収支は度外視して、まずはいろいろなものを作ってみんなが使ってくれたらいいという発想である。医師賠償保険の収益等をこの事業で相殺していくという考え方もできる。とりあえず、事業を促進するためのものをやってみるのがいいという意見が出された。

横井理事長から、ノベルティグッズの具体的な内容についての理事各自の意見は、後日、メーリングリスト、事務局、理事長に個別に連絡する方法が示された。

議論を進めるうちに、「医学部学生および同窓生に向けてのノベルティグッズ」と、「国際交流事業において、国際交流連携

先海外からの受け入れ者に対するプレゼントの意味合いであるノベルティグッズ」の意味が混同されるにいたり、加地先生から、ノベルティグッズを国際交流に使うということは別次元の問題であり、別に新たな事業計画として提案されてしかるべきではないか、と確認する質問が出された。

横井理事長から、たしかにその通りである。医学部の何らかの記念品を作ること自体には理事の皆さんは賛成のようなので、これは事業促進費として検討していただく。まずは基本的には国際交流とは関係ないところのノベルティグッズの開発をし、国際交流事業と絡めて検討するのは次年度以降の議論とすることではどうかと提案・確認した。

乾事業局長から、ノベルティグッズについては、実際の制作は年内には間に合わないかもしれないが、調査費的な予算として50万円を計上する旨が、再度示された。

以上の議論を経て、横井理事長から、資料中の要項にある「国際交流のお土産等にグッズを利用する」という箇所は今回はひとまず削除し「医学部としてのノベルティグッズ開発」に事業促進費50万円を計上すること、グッズが実際に制作され、国際交流の状況もみて援助をどうするかはまた新たに来年以降予算化することが確認された。

以上の予算案審議から、①学生援助基金として、従来の100万円に、国内での国際交流事業への支援としての50万円を加えて、合計150万円に増額する。②事業促進費としてノベルティグッズの制作に向け新たに50万円を充てる③木蓮会支援事業費として、木蓮会奨学金設立のための原資100万円を支援する。④法人化調査費として、本格的に法人化を検討するための調査費として、20万円を充てる。⑤他の項目は従来通りの実績のあるものを提案通り予算化する、ということで理事の承認をあおぎ、拍手をもって21年度予算が議決された。

５．会長選挙・理事選挙について

来年の会長選挙については、会則が「会長選挙の開票は、郵送分に対しては事前に開票公開を行うという」と改正され、その分、総会当日の開票作業が短縮されることが期待される。具体的には、会長選挙の投票用紙を郵送する際に、開票時期の日時、場所を明記した上でお知らせすることになる。理事選挙も同時に案内され、信任・不信任投票を同時に返送してもらうことになる。田井選挙管理委員長を始め選挙管理委員会と事務局を中心に、変更点が会員にわかるような形で段取りをしていくことになることが確認された。

６．香川大学連合会

21年度香川大学同窓会連合会監事の選出について高橋会長から報告があり、昨年度の監事である平川栄一郎先生の再任をお願いしたいということで、平川先生の承諾を得た上で、理事の拍手をもって承認された。

７．その他

会長代行の清元先生から、「最近、なかなか会長代行としての職責を全う出来ないということもあり、今回の執行部会、理事会をもちまして、辞職させていただくことになりました。理事会の先生方には同窓会の活動にご理解とご支援いただきまして、本当にありがとうございました。これからはサポーターの一員として、同窓会活動を頑張って応援していきたいと思います。次節の理事会では、運営の形が変わるかもわかりませんが、高橋会長を中心に宜しくお願いします。」と挨拶があった。続いて高橋会長から、「去年私が会長に再任された時に、大学との関係を密にということで、いろいろ理事会や執行部会の在り方を作り変えましたが、私は学外にいる状態なので清元先生にお願いして、学内の代行をということで立ち上げに非常に尽力していただきました。研修医の問題や大学側との折衝の問題など、非常にうまくやってきて、現在うまくいってるということと、それから、本来であれば２年間を全うしていただければいいかと思うのですが、非常に個人的に負担も大きいということで、今回、急なのですが、一応、職を解いてほしいということがありました。慰留はさせていただいたのですが、本人の希望が強く、本業の方に専念していただくということになりました。何かありましたら、また力を借りることもあるかと思いますので、今回はこういう形でご了解いただく形になっております。」との言葉があった。

会長代行として尽力いただいた清元先生に対し執行部及び理事からねぎらいの拍手が贈られた。

21時30分横井理事長の終了の言葉で理事会が終了した。

速報　平成21年度　讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	日下　隆 （平成3年卒） 香川大学医学部 総合周産期母子 医療センター	新生児における低酸素性虚血性脳症の脳循環・酸素代謝の経時的評価と予後に関する基礎的研究
研究奨励金	中井浩三 （平成11年卒） 香川大学医学部 皮膚科	メタボリックシンドロームマウス皮膚における活性酸素と血管内皮細胞増殖因子（VEGF）産生

第５回（平成21年度）香川大学医学部同窓会讃樹會研究助成者ならびに研究奨励者が決定しました。

今回、全９件の応募に対しまして、12名の外部評価委員によって厳正なる評価が行われました結果、研究助成部門（応募６件）では日下　隆先生が4.29点を獲得、研究奨励部門（応募３件）では中井浩三先生が3.69点を獲得し第１位となりました。（平均点：3.68点／５点満点）　理事会において日下　隆先生に金壱百万円、中井浩三先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、御研究の益々の御発展をお祈り申し上げます。

外部評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償で御協力頂きましたことを誌上からではございますが、感謝申し上げます。

讃樹會研究助成学外評価委員

臨床科

1	伊藤　貞嘉	東北大学大学院医学系研究科　内科病態学講座 腎・高血圧・内分泌学分野　教授
2	香美　祥二	徳島大学医学部医学科 発生発達医学講座　小児医学　教授
3	岸本　武利	大阪市立大学大学院医学研究科 泌尿器科　名誉教授
4	成瀬　光栄	京都医療センター　内分泌代謝センター 内分泌研究部　部長
5	森田　　潔	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 麻酔・蘇生学講座　教授（兼附属病院長）
6	吉栖　正生	広島大学大学院医歯薬学総合研究科 創生医科 専攻探索医科学講座 心臓血管生理医学　教授

基礎科

1	梶谷　文彦	科学技術振興機構（JST）主監／ 川崎医科大学名誉教授／岡山大学特命教授
2	島田　眞久	大阪医科大学　名誉教授
3	西堀　正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 機能制御学薬理学　教授
4	藤田　　守	中村学園大学 栄養科学部　栄養科学科　教授
5	三浦　克之	大阪市立大学大学院医学研究科 薬効安全性学　教授
6	森田　啓之	岐阜大学大学院医学系研究科 神経統御学講座　生理学分野　教授

（敬称略）

平成21年度 第１回　国外留学助成金 選考結果

横平政直（平成11年卒）　香川大学医学部　腫瘍病理学

留学先機関：Department of Pathology and Microbiology, University of Nebraska Medical Center

留学期間　：平成21年5月～平成23年5月

研究課題　：無機砒素の一つであるarseniteの投与2週間後に膀胱粘膜にsimple hyperplasiaが出来ることを確認されており（DNAではarseniteよりも時間がかかる）、2年間の発がん性試験と平行して、さらにarseniteの毒性と発がん性に関する研究を進める。

助成額　　：193,800円

【受賞のコメント】

2009年5月、ネブラスカ大学メディカルセンターに着任いたしました。留学に際し、日本での準備及びアメリカでのセットアップに予想を大きく超えた経費が必要でした。留学先着任後、現在3ヶ月弱になりますが、激減する資金状況の中で、「国外留学助成金決定のお知らせ」を受け大変感激しています。

これまで、香川大学腫瘍病理学で研究活動を行ってきました。研究年数が増すにつれ、「井の中の蛙かもしれない」と感じ始め、アメリカ留学を切望するようになりました。留学先のボスはSamuel M. Cohen教授と言い、日本にもほぼ毎年講演に来ているような超有名な病理学者です。ここのラボへの留学によって、研究成果はもちろんですが、世界における自分の立ち位置が良く見えてくるのではないかと期待しています。

帰国後、香川大学での自分の研究活動に自信を持ち、学生や後輩に世界の中の香川大学を魅力的に語れるよう、現在の留学研究生活を送っています。

先生の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

国外留学助成金 研究レポート

Toronto大学留学記

茨城県総合健診協会
名古屋学院大学大学院
島　昇（平成6年卒）

2005年７月から2007年６月までの１年間、Department of Ophthalmology and Vision Sciences, Faculty of Medicine, University of Torontoおよび同大学付属病院であるDepartment of Ophthalmology, Toronto Western Hospitalに、眼科のclinical fellowとして留学しました。

この留学にあたり、香川大学医学部国外留学助成金を頂き、研究活動の大きな資金援助となりました。深く感謝しております。

その後、2007年7月から2008年6月までの1年間、再び同大学および同大学付属病院に研究と臨床のため留学しました。

これから、今回の留学について報告させていただきます。

私が留学したToronto大学は、1823年創立の歴史ある大学です。医学部は、もともとKing's Collegeと言われていたそうですが、医学部の表示板には、“医学部”とともに、その下に今でも“King's College”と書かれています。Banting & Best がインスリンを発見したことは、よくご承知のことと思います。

Toronto大学医学部は、大学の中央に位置するMedical Sciences Buildingにあり、ここで学生が講義を受けたりしているようです。市内に３つの大きな大学病院（Toronto General Hospital, Toronto Western Hospital, Hospital for Sick Kids）を持っており、臨床系の教室は、それぞれ、これらの病院に分かれています。私が所属していた眼科学教室は、Toronto Western Hospital内にありました。

私は眼科のclinical fellowとして、この病院と私のボスであるMarkowitz先生の持っているオフィースにて、患者の診察や研究のための臨床データの収集の仕事をしていました。Markowitz先生は、もともと緑内障のspecialistでしたが、今はLow Vision Rehabilitationのspecialistとして、臨床とともにAge-related Macular Degeneration（AMD）のPreferred Retinal Locus（PRL）の研究をしています。また、世界で一番権威あり、かつ、一番大きいAmerican Academy of Ophthalmology（AAO）の、Low Vision Rehabilitationのメンバーもされています。先生のオフィースには たくさんの患者が来ますが、その中でもAMDの患者の占める割合は大きいです。私の研究もPRLの機能の研究でした。1年間に350例以上のAMD患者の臨床データを集めることができました。

私は、１年間で３つの研究をまとめました。そのうち２つは、AMD患者のPRLの機能に関する研究です。１つは、”Detection of topographic residual acuity in patients with age-related macular degeneration”という題で、Toronto大学で発表しました。２つ目は、”The rehabilitation of potential visual acuity in age-related macular degeneration”という題で、2006年11月にラスベガスで開催されたAmerican Academy of Ophthalmology（AAO）で発表しました。AAOでは、もう一つ別に、”Low Vision Services in Japan”ついても発表しました。その時、AAOのVision Rehabilitation CommitteeからCertificate of Appreciationを、私のボスとともに頂きました。

２つの研究結果は、たいへん素晴らしいと、ボスからの評価を受けました。これらの研究論文は、それぞれ、世界的権威のある眼科雑誌、Investigative Ophthalmology & Visual Science（IOVS）とRetinaに掲載される予定です。

<NO.1 American Academy of Ophthalmology の Vision Rehabilitation Committee >

また、２回目の留学の時ですが、オリジナルの「色覚視力チャート」というものを作り、「AMD患者の色覚視力に関する研究」をまとめ、昨年、Toronto大学で発表しました。日本では、新しい概念を作り出し、研究するといっても、なかなか認めてもらえません。しかし、私のボスは、上述したとおり、Low Vision Rehabilitationの世界的権威であり、AAOのVision Rehabilitation Committeeのメンバーでもありますから、彼と一緒に発表すれば、この概念も受け入れられるかもしれないと思い、彼の下で研究をしました。

結果は、予想を大きく上回る良いもので、ボスも非常に高く評価し、喜んでくれました。彼は、北米の多くの大学の客員教授でもあり、昨年も、アメリカのEmory UniversityのVisiting Professor Roundでも、この研究を紹介してくれました。この論文も、英語論文として発表する予定です。

日本では、自分の研究のアイディアが良いと思っても、非難の的になるのが落ち、あるいは、研究する前につぶされてしまう可能性もあります。しかし、英語圏では、自分

がやりたい研究の意義や斬新さ、予想される結果等をしっかりボスに伝え、理解してもらえれば、すぐに大学の倫理委員会にかけてもらい、研究して、発表することができます。したがって、“一角千金”ということもあり得るわけです。

若いときは、頭脳が柔軟ですので、素晴らしいアイディアも浮かぶでしょう。また、研究をやり遂げる、逞しい体力もあります。そこで、香川大学医学部の後輩の方々には、専門医試験に合格したら、なるべく早い段階で、留学することをお勧めします。その頃には、自分の興味のある専門分野も、ある程度、決まってくるでしょう。また、たくさんの疑問も持っているはずです。

英語圏の大学では、大きな学会で発表することや、世界的権威のある雑誌に投稿することは、当然です。日本にいると、世界的な学会で発表するとか、世界的権威のある医学雑誌に投稿するなどということは、はるか遠くの世界に感じるかもしれません。しかし、英語圏の大学では、それらは、普通のことです。この「普通のこと」を、できるだけ若いうちに慣れておくことが大切だと思います。そうすれば、若くして、自分の専門分野で権威になることも可能です。

独力で留学するには、とても苦労しました。世界的に権威ある大学に留学したいなどという人は、世界中に、掃いて捨てるほどいるわけです。そこで、先ずは、大学でアクセプトしてもらえる（読んでもらえる、と言った方がより正確かもしれません）自己推薦状や履歴書（Curriculum vitae）の書き方から始まります。うまくアクセプトされた後は、慣れない英文の、大学に提出するたくさんの書類の作成、医師免許発行当局に提出する20ページくらいにわたる医師免許発行の申請書類等々があります。医師免許の発行には、たいへん慎重で厳しい審査があり、いろいろな追加書類や質問に対する回答を求められます。「分からない時は、躊躇しないで電話で聞くように」と、親切に書いてあります。しかし、時差は13時間、昼夜逆転で、夜中に国際電話をしなければなりません。電話をしても、すぐに、相手に通じることはなく、音声ガイダンスにしたがって、番号を押し、すると、さらに、また音声ガイダンスがあり、また番号を押すという感じで、なかなか相手に繋がりません。組織が大きくなるほど、音声ガイダンスの網の目をくぐり抜けることはたいへんです。また、電話を通して話すことは、本当にストレスでした。

しかし、「できない」という甘えは絶対に許せません。現在ある自分の力を出し切って、是が非でも、やり抜く以外に方法はありません。振り返ってみると、このような経験は、自分を鍛えてくれた、とても貴重な経験でした。一つクリアするたびに、達成感と自信が感じられました。忙しい、マンネリ化した病院勤めの傍ら、このような事をするのはたいへんでしたが、とても刺激的で、新鮮だったことを、今でも昨日のことのように思い出されます。

今回留学するにあたり、芝田征二教授、上原正宏准教授の両先生に、貴重な助言、指導、激励をいただきました。お陰をもちまして、臨床も研究も大変充実した、実り多い留学となりました。心より深く感謝申し上げます。

最初に、申し上げました通り、2007年から1年間、再びToronto大学医学部眼科学教室に留学いたしました。この合計２年間に行いました学会発表は、以下の通りです。

1 *Shima N*, Markowitz SN: Color vision acuity in age-related macular degeneration. 50th Annual Research Day, Department of Ophthalmology and Vision Sciences, Faculty of Medicine, University of Toronto, Toronto, CANADA, 5/2008.
2 *Shima N*, Al-Karmi R, Markowitz SN: The rehabilitation of potential visual acuity in age-related macular degeneration. American Academy of Ophthalmology, Las Vegas, AMERICA, 11/2006.
3 *Shima N*: Low Vision Services in Japan. American Academy of Ophthalmology, Las Vegas, AMERICA, 11/2006.
4 *Shima N*, Markowitz SN: Detection of topographic residual acuity in patients with age-related macular degeneration. 48th Annual Research Day, Department of Ophthalmology and Vision Sciences, Faculty of Medicine, University of Toronto, Toronto, CANADA, 6/2006.
5 Markowitz SN, *Shima N*：The Detection of Residual Visual Retinal Locus in Patients with Age-Related Macular Degeneration. The 9th International Conference on Low Vision, Montreal, CANADA, ７/2008.
6 Markowitz SN, *Shima N*, Al-Karmi R：The potential Visual Acuity in Age-Related Macular Degeneration. The 9th International Conference on Low Vision, Montreal, CANADA, ７/2008.

連絡先（E-mail）
：shimanoboru@aol.com　shimasatsuki@aol.com

21年度学生の国際交流助成

短期留学報告

6年　真嶋　允人

①学習状況

ニューキャッスルでは、大学に隣接したRoyal victoria infarmaryと、二つの関連病院（Freeman Hospital、Newcastle Gerneral Hospital）で、臨床実習を行いました。実習の基本的な形は香川大学で行われているポリクリと大体同じで、病院のスタッフの先生方について回診を行ったり、外来・手術などの見学をしたりしました。イギリスと日本の研修の違いで特に印象に残ったのは、診断を行う際の手段の違いです。日本では画像診断を利用する頻度が高いですが、イギリスでは患者さんの訴えや身体所見を重視して診断を行っていると感じました。実習中に画像を見ることはほとんどなく、患者さんの特徴的な所見について質問をされたり、教えてもらったりすることが多かったです。

香川ではあまり見られない疾患も色々見学できました。今回の実習期間中には、感染症科、腎臓内科、消化器外科を回りましたが、HIVや結核などの感染症の診療や、腎臓移植手術などが特に印象に残っています。

入院患者さんに対する学生の裁量も大きいと感じました。ほとんどの病室には自由に出入りしてよく、採血や静脈ライン確保などをする際も学生だけで行うなど、かなり実践的なことをさせてもらいました。

②生活状況

今回私たちが滞在したのは主に大学の下級生が入る寮だったのですが、朝・夕食は食堂で食べることができ、24時間守衛さんがいるなど非常に恵まれた環境でした。各部屋にトイレ、バス、キッチンがついていたので、特に生活に困ることはありませんでした。

寮から10分ほどのところにはスーパーがあり、たいていの日用品や食品はそこでそろえることができました。その隣には専門店がたくさん入ったデパートがあり、この二つのことを私たちのうちでは「マルナカとユメタウン」と呼んでいました。そこからさらに10分ぐらいの位置にNewcastle Central Stationがあり、周辺はレストランやパブがたくさんある中心街となっていました。春には9時ぐらいまで明るかったこともあり、大通りを歩く限り治安の面で不安を感じることは特になかったです。

③後輩へのアドバイス

実習では身体診察が重視されるので、OSCEで勉強したことを復習していくとよいと思います。また、患者さんと一対一で予診をとらせてもらう機会もあるので、3・4年時の医学英語の授業でやったことをもう一度練習するのも必要だと思います。もちろん専門用語についての知識は多ければ多いほどいいです。

今回、今までとまったく違った環境で医学の実習をしてみて、自分が勉強すべきことがはっきりイメージできるようになりました。得るものは非常に多いと思いますので、積極的にチャレンジするといいと思います。

Newcastle周辺にはダラム、エジンバラなど非常に景観がきれいな都市が多数あるので週末はよく旅行に行きました。

④結び

今回、コーディネーターの徳田先生、Schmid先生をはじめいろいろな先生にお世話になりました。とてもいい経験をさせてもらい、非常に感謝しています。この経験を自分の将来や後輩のために生かしていきたいと思います。

6年　鈴木　裕美

私はこの度イギリスのニューキャッスルで臨床実習を行う機会に恵まれました。全期間は6週間で、感染症内科、小児科、腎臓内科の順番で2週間ずつ回りました。私は英語でのコミュニケーションに特に困ることはありませんでしたが、医学知識や医学英語のボキャブラリー不足は想像していた通り、実習を行う上でかなりハンディであったと思います。しかし、感染症内科では4年生の医学生が快く力になってくれたおかげで、回診やディスカッションの理解が深まりました。イギリスは日本とは異なり人種が多様な国ですので、私のような外国人がグループに突然入ってきても違和感なく受け入れてくれました。特に中でも私と同じように子供が3人いる医学生とは、プライベートなことまでいろいろ語り合う機会もあり、彼女とは一生励ましあいながら育児に仕事に頑張っていきたいと心から思いました。

イギリスでの臨床実習について自分

が印象に残っていることは、医学生の臨床能力の高さや実践的な講義の他に、実際にHIVの患者さんに会い、病名を告知された時から今までの葛藤や生活上の悩みを聞く機会があったことです。「HIVは糖尿病などと同じような慢性疾患だ」という言葉に自分の中にあった醜い壁が崩れたような気がしました。また、イギリスは児童虐待防止のためのシステムが確立されつつあり、少しでも疑わしいケースは小児科医や保健師、ソーシャルワーカー、警察官が病院に集まってミーティングしていました。私は何度かそんな会に参加しましたが、将来日本にも多様な専門家が集まって討議するような場がつくれたらと思いました。また、子供のホスピスを見学しに行くことができたことも貴重な経験でした。日英の違いを単に比較するにとどまらず、自分の将来像、香川大学の新たな可能性について思いを巡らせ、決意を新たにすることができたのは大きな収穫だったと思います。

イギリスでの生活についてですが、非常に快適でした。私にとって家族の世話をしなくてよく、24時間すべてが自分のものであることは実に14年ぶりで、そういう意味でとても新鮮でした。平日は寮の食堂で朝夕と食事をし、食後は部屋で勉強をしたり、ペーパーバックを読んだり、レポートを書いたりして過ごしました。その代わり週末は羽を伸ばすことにして、グラスゴーやエジンバラ、海、湖水地方、ハリーポッターで有名なアニック城などたくさん旅行をして楽しみました。

これからイギリスで実習をされる学生の方々は、いつも好奇心をもって積極的に行動されることを心がけられたらいいと思います。イギリスでは日本のように至れり尽くせりのポリクリではなく、やりたいことや見たいことを先生方にお願いして実現するという形なので、積極性や好奇心がないと何も得られずに終わってしまいます。ぜひ、いろいろなことに興味を持ち周りの人に、"May I ask a question? Can I try this?"を連発していただきたいと思います。

最後になりましたが、私にこのような実り多い留学の機会を与えてくださった先生方に感謝いたします。また、この留学を実現するにあたり東京から子供たちの世話に来てくれた義母と快く送り出してくれた夫や子供たちに、心からありがとうと言いたいです。You make me the luckiest and happiest person in the world! Thank you very much.

イギリス人のポリテク生と一緒に

小児科外来の入り口

折鶴をあげると
患者さんが笑顔に

Newcastle University

St George's, University of Londonならびに Newcastle Universityへの臨床留学報告

6年　川久保　充裕

この度、1992年より続くNewcastle Universityへの留学に加えて、来年度より正式に始まるSt George's, University of Londonへもトライアル的な意味合いが強いですが、香川大学からの最初の学生として臨床留学をすることが出来ましたのでここに報告させていただきます。

初めにNewcastle Universityでの研修ついてお話しさせていただきたいと思います。Newcastleはイギリスのイングランドとスコットランドとの境目に近いイングランド北東部にある比較的大きな都市でかつては工業地帯として有名であった場所です。Newcastleには３つの臨床研修病院があり（Newcastle General Hospital, Royal Victoria Infirmary, Newcastle Freeman Hospital）、これら３つの病院において私は通常の２週間×３科を１つ延長させていただき、腎臓内科、小児科、感染症内科、心臓胸部外科の４つの科をそれぞれ２週間ずつ計８週間の研修をさせていただきました。各科においては、朝の回診などで病棟の患者さんの大まかな様子をつかみながら、患者さんの病歴聴取、身体診察などを自主的に行い、自分なりのカルテを作成した上で、鑑別診断などを含めて先生にプレゼンテーションを行い、それらをもとに先生からフィードバックを受ける。という方法の繰り返しによって主に勉強をしていました。時には、外来見学、手技的な事、たとえば採血など

感染症内科においてDr Schmid先生

を実際に患者さんに対してさせていただく機会もありました。

Newcastleでの８週間で印象に残った経験の１つとして、心臓移植と肺移植のドナーからの摘出術に手洗いをして参加させていただいた経験があります。Newcastle Freeman Hospital のCardiothoracic Surgery Departmentにはイングランドの北東部のすべてを担当する心臓･肺移植チームがあり、私の２週間の研修中、一晩その移植チームに参加する事が出来ました。その晩は２例の脳死のドナーからそれぞれ肺と心臓を摘出しました。驚いたのは２例目のケースにおいてはドナーが北アイルランドにいた為に、深夜の２時にプライベートジェットで予期せぬ形で北アイルランドに行く事になったという事です。

ドナーチームは、心臓胸部外科医１名、看護師１名、心臓・肺の運搬における保存液の専門家１名、そして私という４名の少数精鋭チームであった為に

心臓胸部外科において手術室前で。外科医の先生と共に

各摘出術において私は、先生の前立ちという形で一番見学しやすい位置で、手術を手伝う事が出来たのは、非常に幸運な事であったと思いました。

Newcastle滞在中には他にも、GP（General Practitioner）clinicに見学をしに行かせていただいたり、世界で初めてとなる小児専門のHospiceであるHelen and Douglas Houseに見学をしに行かせていただいたりもしました。

次にSt George's, University of Londonにおける２週間の研修に関して報告させていただきたいと思います。冒頭にも少し述べましたように、私が英国に出発したのち、４月中旬ごろ、St George' sのProf. Peter McCrorieの多大なるご協力と、香川大学の先生方のご交渉により、来年度より香川大学からの学生の研修の受け入れを正式に認めていただける事が決まりました。私自身が３年生と４年生の時に、夏休みブルネイへ留学させていただいていた経験があり、その際にSt George'sよりUBD（Universiti Brunei Darussalam）の医学部の設立､教育方法に関して指導に来ていたProf Peter McCrorieの指導のもとPBL（Problem Base Learning）を行いました。その時に私は一度先生と面識があり､いつかイギリスに行きます。ともその際、Profとお話しをさせていただいていたので､表敬訪問も兼ねて２週間トライアル的な要素が強い物でしたが、St George's hospitalにて研修をさせていただく事が出来る運びとなりました。

St George's, University of London

St George's, University of Londonの滞在中に。Prof. Peter McCrorieとブルネイから臨床実習に来ている学生達と共に夕食会。

さてSt George's, University of Londonはロンドン市内よりTubeとよばれる地下鉄で30分くらいのロンドンの南西に位置するTootingという町にあります。Tootingの街は市内中心部ほど地価も高くない為､パキスタンやインドなどからの移民の方が多く住む街になっており、一般に想像される英国のイメージとは少し異なる感じでした。またイギリス中のどこよりもカレーがおいしい街と学生たちは話していました。実際にカレーを食べる機会が何度かありましたが、どこのお店も味はとても美味しかったです。さて、大学に関してですが、University of Londonには他にもKing's collegeやImperial collegeなど医学部を持つ学校はありますが、ここSt George'sのみが医学部しか持たない医学校という形を取っております。ゆえにSt George'sは Newcastleとは大きく異なり、大学自体が病院に併設する形で設立されており､ゆえに､総じて香川大学医学部と非常に似ている立地になっております。しかしながら病院自体が非常に大きい事から大学の建物は香川大学よりも少し小さめですが、全体を合わせると非常に大きい印象を受けました。

そんなSt George's Hospitalにおいて、私は腎臓内科を再び２週間学ばせて頂きました。Renal Medicineの教授であり私のSupervisorのProf. David Oliveiraの指導のもと、Newcastleと同様の病棟回診、患者さんへの医療面接､身体診察などを学びました。

また、１例だけではありますが生体腎移植を見学させていただく事も出来ました。Prof. David Oliveiraの勧めから腎臓内科だけでなくＡ＆Ｅ（Accident & Emergency（日本でいうところの救急に当たります。））においてOn call doctorの仕事の見学をさせていただいたり、初診の患者さんの

St George's Hospital Prof David Oliveiraと向こうの医学生と共に

医療面接ならびに身体診察をさせていただき、先生にPresentationをさせていただいたりしました。Presentationを行う際には先生より鑑別診断や治療法などの試問をしていただきました。このA & E での経験は非常に勉強になりました。

St George'sとNewcastleを比較した時に、もう一つSt George'sの特徴として言える事に、海外からの留学生が非常に多いことが挙げられます。これは一つにSt George'sが英国内においても、非常に古い医学校として存在し、医学教育の研究にも非常に熱心な学校であり医学教育に関して非常に大きな影響力を今でも持っている事が理由に挙げられます。医学教育への影響は英国内の大学へはもちろん、他の多くの旧大英帝国の支配下にあった国々（マレーシア、ブルネイ、カナダ、オーストラリア等）の医学教育にも大きな影響を与えており、そのような国々からの留学生を多く受け入れているという現状があります。

また大学も留学生同士の交流を勧めており、月に１度程度International Student Partyと題して留学生が集まれる機会を大学が設けていました。私も一度滞在中に参加させていただきました。そこでは多くの海外の医学生と知り合う事、話をする事で新しい医学に対する考え方や、価値観などを知る事が出来ました。

長いようであっという間の10週間でしたが、この10週間で自分の目指す医師像をより明確につかむ事が出来ました。また研修を通じて多くの新しい友達を作る事ができ、彼らと交流を重ねる中で多くの価値観や新しい考え方を学ぶ事が出来ました。

この貴重な経験を大切にして、将来またいつの日か海外で臨床医として働ける機会が巡ってくるように、日々の勉強を引き続き一生懸命取り組んでいきたいと改めて思いました。

St George's, University of Londonにおけるinternational student party
非常に海外からの留学生が多いのがSt George' sの特徴の一つでもある。

St George' s, University of Londonからの修了証

研修医協力事業報告

第二回かがわ卒後臨床研修研修医発表会に参加して

讃樹會副会長
香川県立保健医療大学教授
平川栄一郎（昭和61年卒）

先般、四月十日に全日空ホテルクレメント高松に於いて開催されました第二回卒後臨床研修　研修医発表会に、高橋則尋会長の代理として関啓輔副会長とともに出席して参りました。この発表会は香川大学附属病院卒後臨床研修センターが中心となり、武田薬品工業のご協力により行われましたが、讃樹會においても他の卒後臨床研修支援事業と同じようにこの発表会に対して積極的に後援を致しております。

発表会は、参加者、演題数ともに昨年を大きく上回り、100名近くの参加者と13演題が発表されるという盛大な催しとなりました。発表は臨床研修センター室員である清元秀泰先生の司会で始まり、香川大学医学部附属病院卒後臨床研修センターあるいは県内の主要医療機関で研修を受けた卒後２、３年目の先生方が、臨床研修中に担当、経験した症例についての発表を行いました。各専門領域での学会発表となりますと、その分野、領域は限られたものとなりますが、今回の発表会は臨床研修中に担当した症例の発表会ということで、発表者の所属は多岐にわたり、その内容についても遺伝子解析から患者さんの退院後のフォローや医療支援に関るものまで多種多様な発表内容でした。発表では非常に質の高い、どの学会に出しても遜色のないすぐれた発表内容が多くみられましたが、今回が医師となって初めての発表であるという先生や、５分間という時間内に簡潔に症例をまとめ、自分の学んだことを伝えることになかなか苦労された先生もいたようです。しかしながら、どのプレゼンテーションをとっても、研修医の先生方の熱意が伝わるもので、また会場からは熱心な質問や称賛、時に厳しいご意見が出され、非常に活発で充実した発表会となりました。専門分化した学会発表というものはもちろん重要であり、今後研修医の先生方はそのような学会で発表を重ねていくことになります。今回の発表会は専門分化したものではありませんが、自分の専門とは異なる他科のことだから関係ないと言って簡単に済まされる問題ではありません。地域医療で総合的な知識や経験が求められる医師という立場にたてば、このような発表会は非常に有益で不可欠なものです。そういった意味でも今回の発表会は研修医の先生方が初めて発表を行うに相応しい場となったことと思います。

思い思いの演題で13ものエントリーがあった発表会

発表終了後は讃樹會横井徹理事長から、発表者全員を対象として最優秀賞、審査員特別賞、優秀賞、奨励賞の賞状と副賞が贈られました。最優秀賞には、産婦人科医療の現場で緊急に求められる判断やそれに対する心構え、医師と患者家族の人間関係構築の重要性について発表を行った屋島総合病院の小西久美先生が選ばれました。また、特別審査員を務めた栗林病院長の前場隆志先生と循環器内科の長谷川浩一先生からは総評と研修医の先生方への激励の言葉を頂きました。

その後「研修に役立つ糖尿病治療」というテーマで卒後臨床研修センターの松原修司専任講師による特別講演が行われ、引き続き情報交換の場としての懇親会が催されました。発表会、懇親会ともに多くの指導医の先生方にご参加いただきましたが、香川大学附属病院長兼卒後臨床研修センター長の石田俊彦先生からは、発表にとどまることなく出来る限り英文で論文を書いてほしいとの厳しくも温かい激励を頂きました。このように今回の発表会は研修医の先生方にとって非常に実り多きものとなったことと思います。讃樹會としても今後この会がますます盛会となり香川の医療の向上の一助となることを祈ってやみません。

発表者に横井徹理事長から賞状と副賞の贈呈

石田俊彦附属病院長

特別審査員の
前場隆志先生（左）と
長谷川浩一先生（右）

特別審査員の
関啓輔副会長

長尾省吾前附属病院長

司会の
研修センター室員の
清元秀泰先生

研修センター専任講師
松原修司先生

懇親会場にて

最優秀賞

初期研修の最後に手に入れたもの

小西久美（平成19年卒）

『先生は人前で発言する積極性が足りない。』

研修協力型病院の屋島総合病院、産婦人科研修の最終日。指導医に総括でこう言われました。

これまで常に指導医に恵まれて来た私ですが、自科に進まないとわかっている研修医をこれ程熱心に観察・指導・評価してくださる指導医の存在に感動しました。確かに人前で話すのが苦手な私。同期が続々と学会発表を経験している姿を尻目に、いつも逃げていたのです。今回この指導医の評価を受け

『初期研修の締めくくりに、一度積極的になってみよう。成長してみよう。』

と、発表にチャレンジすることにしました。初期研修期間中に印象的な症例を多数経験しましたが『積極的になれ!』と言う指導医の診療科で、最近何かと話題の産婦人科症例を選択しました。様々な診療科が関わっていた症例で、指導医のみならず他科の先生方にもご指導戴きました（科を超えて研修医を指導する雰囲気は屋島総合病院の特徴です）。研修医という特殊な目線で経験した、産婦人科医療の恐ろしさを伝えようと発表原稿を作り、迎えた4月10日。私は壇上でスポットライトを浴び、最優秀賞という身に余る賞と同時に人前で発言する勇気と自信をちょっとだけ頂くことができました。

全く優秀ではない私がこのような賞を頂き、この2年間に関わったどの人との出会いも欠かすことはできなかったと、今改めて思います。整った指導体制、気の置けない同期、信頼できる指導医に恵まれ、母校と屋島総合病院での初期研修は本当に良い選択だったと確信しております。

最後になりましたが指導医の屋島総合病院産婦人科　河西先生、このような賞を与えてくださった讃樹會の皆様に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

5年生6年生と研修医・指導医との懇談会開催

▼5月25日

松原専任講師

本院研修制度の最新情報提供の場として定着してきた「医学科５年生６年生と本院研修医･指導医との懇談会」が、卒後臨床研修センターの主催で、５月25日夕方開催された。

卒後臨床研修センターの松原修司専任講師（平成４年卒）の司会進行により、前半は来年度のオリーブかがわ卒後臨床研修プログラム（“２０１０MANDEGAN”と命名）を中心に研修全般に関する丁寧な説明が行われ、後半は実際に母校での研修1～２年目及び協力病院で3年目の後期研修中である先輩の体験談やアドバイスが続いた。今回、５年生と６年生を合わせて117名の参加があり、参加率は年を追うごとに増えている。参加者に嬉しい軽食・飲み物のサポートは、例年通り同窓会が後援した。

Series 教授の横顔

聞き手／名誉会長　濱本龍七郎

薬理学　西山　成 教授

日時　平成21年４月７日㈫
13：00～14：00

濱本　2003年から始まった教授の横顔シリーズですが、初めて母校出身の教授に登場いただき、非常に感慨深い思いです。平成19年の２月に教授に就任されたのですが、香川医大開学以来30年以上経った大学としてどのように思われますか。

西山　講演先の各地で香川大学出身の先生とお会いする機会などもかなり増えてきましたので、香川大学医学部の歴史がそれなりにできてきていると感じる反面、昨今の大学改革によって、東京大学や京都大学のような中央の大学との格差が、特に研究面では顕著化してきているという気もします。また、合併して独立法人化したことで、まだ大学自体がバタバタしているような印象を非常に強く受けます。僕らの学生時代の方が、全体的にゆったりとしていたような気がしますね。

濱本　最近の学生はどんな印象ですか。

西山　昔のワイルドな雰囲気に比べ、最近の学生さんは今風に言うと草食系の方が多いのでしょうか。例えばアンケートの回答を見てもそうですし、酒を飲みに行ってもおとなしいです。ただ、非常にモチベーションが高いのは昔と同じという気がしています。

濱本　今の学生に望まれることはどういうことですか。

西山　よく学生に話をするのですが、「今の一瞬をとにかく大切にして欲しい、無駄にして欲しくない」の一言につきます。これは今年の謝恩会の時に卒業生にも話しましたが、私の場合は父が倉敷で開業しており、生まれた時から病院を継ぐように決められていました。実際、父の言うとおり臨床研修は岡山大学で行ったのですが、その後は母校に帰ってきて、大学院、留学、帰国後母校でまた基礎の研究、そしてそのまま教授になったということで、初めに考えていた路線とは大きく外れていますよね。すなわち、そのポイント、ポイントでは全力でやっていて、それぞれが点でしかなかったものが、今40歳になって振り返ってみるとようやく何となく線となってつながってきているのかなという感じがしています。ですから、「大きな夢を持って今の一瞬一瞬を大切にして全力を尽くして欲しい、最初からありきたりの線引きなんかをして可能性を自分で潰すようなことはして欲しくない」というのが学生さんたちに対する希望です。

濱本　基礎に入られた一番のキーポイントはなんでしょうか。

西山　留学中に必死で研究して論文が注目され、世界中に多くの仲間ができました。そのうちに自分のやっていることが非常に楽しく思え、これを一生の仕事にしてもいいかなと思ったというのが正直なところです。それから自分のように不器用だと、日々診療しながら十分な基礎研究を続けることが難しいように思え、研究に重きを置く道を選びました。

濱本　研究に対するお考えを伺いたいと思います。

西山　私は香川大学医学部の教員として研究しているという自負がありますので、最終的に医療に結びつく研究をしなければいけないと思っています。もう一つは、自分には臨床経験もあり医師免許を持っているという、ある意味の特権がありますので、患者さんと接していろいろ疑問に思ったことを真摯に研究に結び付ける使命があると思っています。したがって、我々の教室では基本的には培養細胞を使った実験、動物実験、臨床研究、これを三つの柱として必ず並行して考えるようにしています。しかし問題は、ここ２年くらいで論文がぱたっと通らなくなってきたことです。我々がいつも投稿している臨床系の雑誌は、以前は基礎：臨床研究が９：１だったのですが、今は臨床研究が６割くらいで、しかも、前向きの二重盲検試験が半分以上です。基礎研究分野では患者さんの病態を反映したことを基礎的に解析するのが一番大切だと信じてやってきたのですが、現実的にはやはり遺伝子をいじくったりしないとなかなか論文が通らなくなってきました。臨床研究においても、もちろん症例報告や探索的研究は大切なのですが、エビデンスを求めるための前向きな研究の方が評価されるような時代になってきました。ですので、教室員や大学のためにも、そろそろ自分の考え方を変えて柔軟に対応していかなければいけない時期に来ているのではないかと思っています。

濱本　今、お話を聞いていると、研究面でも、論文をアクセプトされるというのが、今、時代が求めているものという判断となりますね。

西山　そうですね。特に基礎の研究者は、論文が評価されなかったら科研費などの研究費がもらえなくなり、その結果として研究を続けることが難しくなる、そうするとますます論文が出せなくなるという悪循環に陥るんですよね。これは病院経営も一緒だと思います。確かに自分の研究に信念を持って実験を続けることは重要ですが、教室や大学全体のバランスを考えた研究ビジョンも必要であると思います。

濱本　教育についてはどのようなお考えでしょうか。

西山　私の学生時代は、ウィンドサーフィンばかりやっていて殆ど講義に出なくて先生方に怒られ、追試していただいたり、レポートで何とか通してもらった学生だったんですね。ですから、今になって率先して「とにかく毎回出席しなさい」とは、真顔ではとても言えないのが正直なところです。教育に対して心がけていることは、情熱と愛情を持って学生に接するという一点につきると思います。

濱本　同窓会でもいろいろ活動されていると思いますが、同窓会、卒業生に望むものは何でしょうか。

西山　まず、執行部サイドから言わせていただきますと、会員会費を払っていただくということがございます。会費

を払っていただくということは、やはり興味を持って同窓会との関係を続けていく、英語でいう「keep in touch」ですよね。一つのチームとして、お互い少しずつでもずっと連絡を取り合いましょうということで、特に学外に出た方に対してそれを強く望みます。同窓会の最終的な目標というのは二つしかないと思います。一つは、現在大学にいる在校生、あるいは卒業生の在職者の地位の向上を目指す。もう一つは学外に出ている卒業生の地位の向上を目指す。あるいは、学外の卒業生がうちに帰ってきた時に、香川大学医学部で働きやすいような環境を作ること。これら二つの目的を達成することが、香川大学医学部の発展につながるものであると信じています。ですので、学外に出る先生方には是非協力していただきたいと思います。私自身も学外に２回出て２回帰ってきた人間ですので、やはり外から帰ってくる方に働きやすいような環境を与えるのが我々の責務であると思っています。常にそういった視点で物事を考えて、これからも同窓生の意見を代弁するつもりで積極的に意見を述べ続けて行きたいと思っています。

濱本　まあ、今の２点に尽きるかもしれませんね、同窓会の在り方というのは。

西山　中にいる人たちはものすごくお手伝いしてくださっているのですが、学外、とくに遠方にいる同窓生たちにも、もうちょっと「keep in touch」ということをお願いしたいです。

濱本　今までいろんな話をしていただいたのですが、大きな視点で香川大学医学部の将来はこうあるべきだと思えるものはありますでしょうか。

西山　現在、香川大学は独立大学法人として評価を受けていますが、教育や診療に関しては非常に進んでいて、研究に対してはかなり遅れているという現状を目の当たりにしています。教育だと、ほとんど全教員がカリキュラム・シラバスなどをしっかり書いて実行していくような、ものすごい努力をしていますし、また附属病院にしても収益を上げるために、みんな本当に頑張っています。その中で、研究だけは落ちてしまっている、という状況なのです。ランキングの出し方にもよるのですが、香川大学医学部は少なくとも中四国の大学の中で科研費の採択率は最下位です。香川大学医学部が優れているか優れていないかということを周りから判断される場合に、もっとも評価の対象となるのがこの研究です。ですので、そういった現実を考えると、研究が最下位であるということが、将来的に全てにおいての負のスパイラルにつながることを危惧しています。

濱本　いつの間にか最下位になっているとは知りませんでした。原因は何でしょうか。

西山　僕自身、基礎の教室の研究者として、何故こんなに研究業績が落ちているのかなと考えるんですが、出てきた結論は、マンパワー不足、教員の雑用疲れ、評価疲れ、教育疲れ、診療疲れ、というのが根本にあると思います。

濱本　どのようにしたら研究を盛り上げていけると思われますか。

西山　これまでは教育の学務委員会のような、研究に関する委員会が医学部の中にはありませんでしたが、同様の組織を一昨年くらいから作っていただいて、数名の教授が集まってワーキングなども作っていこうという運動をしています。一方、「大学評価」という、政府が我々自身の掲げた目標に対して達成しているかどうかを評価するシステムがあります。言い換えれば、そこに研究の努力目標を盛り込むことで、それを絶対にしなければいけない状況になります。次期の香川大学の目標として、附属病院の先生方が先端医療を見据えた研究の実行を盛り込まれました。我々は医学部に所属していますので、基礎的な研究に加えて臨床研究をきっちりやる体制作りとか、近い将来行われる先端医療に備えた体制を確立するような努力が必要と考えます。基礎実験と臨床研究を融合させ、大きな視野を持った香川大学医学部の研究ロードマップを考えていく努力が、今こそ必要なのです。今年から始まった石田病院長の地域医療を考えた糖尿病のプロジェクトのように、広いビジョンを持って政府からの大型資金を取ってくるような努力をもっともっと続けて行って、香川大学医学部全体の研究を盛り上げて、評価を上げていかなければいけないと思っています。

濱本　ぜひ、それはやってもらいたいです。せめて、中四国の半分くらいにはなりたいですね。

西山　やはり、もと単科大学で一番になりたいですね。

濱本　その気持は大事なことですよ。

西山　その部分については、医学部執行部も附属病院執行部の先生方も共通した認識をお持ちです。例えば附属病院の事を考えますと、病院経営のことだけ考えたら、今そういう先端医療の準備をしておくというのはマイナスでしかないですよね。でも、再生医療やiPS細胞ということを30年後、50年後に普通にやるようになる時代を前にして、ここで今そういった準備を怠ってしまうと将来的には香川ではそういった最先端な治療が出来ないような状況になりかねないと思うんですね。すなわち、香川大学は、全国で唯一、先端医療ができない大学附属病院になってしまうかもしれないわけです。そこで今回、附属病院の先生方が、先端医療を開始するためのシステムを大学に作るということを大学の次期中期目標・中期計画に盛り込まれる大英断をされました。こういった作業を進めて行くことによって、在校生・在職者の方が夢と希望を持って、香川大学医学部で働いていただけるような環境作りができればと思っています。基礎屋である私も自分の細かい得意分野ばかりではなく、そういった大きなビジョンを持って医学部全体の研究をお手伝いしたいと思っています。

濱本　そういう大きな目標を持ってやっていただくのはうれしい限りですね。お忙しいところ、ありがとうございました。

消化器･神経内科　正木 勉 教授

日時　平成21年４月14日㈫
　　13：00～14：00

濱本　母校出身の初の臨床の教授、特に内科の教授は、2260名の卒業生において初めてですし、同窓生は大いに感動したわけですが、その辺に関しては、１年経っていかがでしょうか。

正木　実は、新設医大の卒業生には内科の教授になるよう

な道はないと、多くの卒業生の方がそう認識していたのではないかと思いますし、私もそう思っていました。しかし、新設医大卒業であっても、そのような道もあるということで、多くの母校生が自分もひょっとしたらやれるのではないかという意識が高まったのであれば、私にとって大変嬉しいことだと思っています。

濱本　卒後18年で内科の教授になられたことは、年数的には奇蹟に近いと思いますが、今後何を重要視すれば、さらに、卒業生から教授が生まれると考えられていますか？

正木　新設医大は歴史が浅いし医局員数が少ないのだから論文業績数が旧帝大に負けてもしょうがないと考え、その他のファクターで教授選を臨もうとする考え方は、私は大きな間違いだと思っています。一番不利なファクターから目をそむけず、そこで勝つことを目指すべきだと思います。

濱本　論文業績は、重要だということですね。

正木　はい、必須ファクターであると思っています。

濱本　それでは、研究に関するお考えを述べていただけますでしょうか。

正木　研究をする上で、研究方法や手法も何でもいいです。その人が最も得意なやり方で研究をしていく。やはり臨床教室ですから、研究の方向性としては、将来においてその研究が、現在の臨床を変えてくれるような研究を目指していきたいとは思っています。

濱本　ここの学生の印象はどうでしょうか。

正木　非常に活発です。また、私は２年ほど東京大学に行ったのですが、能力的にも全然変わりませんね。

濱本　おとなしく、真面目な人が多いと、よくそういう話が出ますが。

正木　自分の学生時代、真面目な人が多かったという印象は全くないです。割とクラブ活動や大学祭などの活動に熱心な人が多かったように思います。おとなしいとか、モチベーションが足りないとは私自身は全然感じてないのですが。

濱本　教育に対するお考えはどうでしょうか。

正木　学生教育に関してはある意味フリーハンドです。私の授業で出席をとるようなことは無いです。それから、若い医局員には、まず臨床をきちんとやって、その中から努力を努力と思わないような自分の好きな道を選びなさい、という教育方法をとっております。そして自分の選んだ道を継続していくことこそが成功の一番の早道ではないかなと思っています。

濱本　先生の場合、自分の好きな道との出会いはどうだったのでしょうか。

正木　そうですね、1990年に卒業しまして、西岡幹夫先生が主宰しておりました第三内科（現在の消化器・神経内科）に入局しました。その頃第三内科の病棟は、50床のベッドのうちで半数近くが肝細胞がんでした。肝細胞がんは、患者が多く、予後も悪い疾患でした。そういったことから、自分は肝細胞がんを研究テーマ、あるいは臨床のテーマにしようと、入局一年目で決めました。西岡先生は、自己免疫性肝疾患が専門でしたので、同期の多くの仲間は、この分野に進みましたが。

濱本　大学も創立して25年が経ちますが、我が大学は全国区になり得ているとお考えでしょうか。

正木　私が入局した頃というのは、第三内科（現在の消化器・神経内科）の関連病院が悲惨でした。でも、新しい臨床研修システムが始まって、新設医大に大きなチャンスが出てきました。つまり、県内において大きな関連病院を占めていた岡山大学、徳島大学が引き上げ、主要な市中病院がどんどん香川大学の関連病院になってきているし、今後もとれるだろうと思っています。消化器・神経内科においても、20年前と今では関連病院の数、質が全く違う、これが、私の実感です。魅力のある香川大学医学部にするためにも、やはり関連病院は重要です。そういった意味においても、全国区になりえているのではないかと考えています。

　また、卒業生が全国にちらばってネットワークが出来たわけですから、香川大学も伝統が出てきたと思っております。そしてこれは、今後の卒業生にとって大きなチャンスであると思っています。

濱本　関連病院の今までのスタンスは、どうしても、公的機関病院は行かせていただいていたという印象がぬぐえません。ところが先生は、妥当なポストを与えないのなら貴病院には派遣しませんとはっきりした意思表示をされたということですが、私の個人的意見と受け取ってもらっていいのですが、そのくらいのポリシーというかプライドを持って、卒業生を派遣するという、それは強い意志を感じられますが、その辺はいかがでしょうか。

正木　今、香川大学のどの臨床科においても、コアーとなる人材は香川大学の卒業生で占められているのが現状だと思います。フェアーな目で見れば、力をつけた香川大学医学部の１期生から10期生あたりの卒業生が、香川県の基幹病院の中心的医師になるのは当然の成り行きではないかと思っております。

濱本　それでは、同窓会、卒業生に望まれることは何でしょうか。

正木　同窓会は非常に卒業生のために、いろいろやっていただいていますが、特に研究助成制度ですよね。若い優秀な方が全国にいますから、金額ではなく、こういう制度があることによって、全国の卒業生の研究に対するモチベーションを高めてくれます。是非これからも実施していただきたいと思います。それと、全国に広がった卒業生のネットワークを同窓会が中心となって作っていただきたいと願っています。そして、今後は、優秀な卒業生の中から、他大学にも教授として輩出することができる、ここが母校のさらなる飛躍の段階、セカンドステージだと思っています。是非ともセカンドステージに到達できるように同窓会が力になっていただきたいと感じております。そのためにも、大学を離れて、地元に帰る、あるいは都会に行った方にも十分応援してあげるということも必要だと思います。初代院長恩地先生が卒業生におっしゃった言葉と記憶しています、“君たちがどこに行こうが、君たちの背中には香川医大卒ということが、インプリントされていることを忘れないでほしい”と述べておられます。くちはばったいのですが、卒業生に臨むことは、一人一人が、香川大学医学部卒という自覚をもって、邁進していただければと思います。もちろん、恩地初代院長の言葉は、私に対する戒めの言葉であるとも感じております。

濱本　医局に属していない人がもし、香川に帰ってきたいと言われた時は、先生は引き受けていただけますか？

正木　ウエルカムです。来るもの拒まずです。僕の精神と

しては。消化器・神経内科をやっているのだけどもさらに、発展したいという方は大歓迎します。大事なことは、やる気がある、これだけです。

濱本　それは非常に嬉しいことだと思います。消化器・神経内科には毎年、新規で４、５人入っており非常に人気が高いのですが、卒業生に対して、勧誘方法とか、今後の方針などはどういうスタンスでしょうか。

正木　まず、僕らの入局の頃と比べて、治療重視の、早期の消化器ガンを内視鏡治療で切らずに治せる時代に突入してきたということで、消化器部門は全国的に人気が高くなったということは、否定しません。だから、私が教授就任後は、初期臨床研修医に対して、わずか３か月という短期間ではありますが、その期間中に指導医のもとで実際に、自分の患者さんに内視鏡とエコーをやっていただくというシステムを採用いたしました。これは非常に人気が高くて、１年目で選択した人が、再度、２年目でも選択してくれています。私の教室勧誘のひとつの目玉にしております。

濱本　先生の人生観としては、才能より努力ですか。

正木　そうですね。より努力した者に、より多くの幸運が舞い降りるものじゃないでしょうか。才能だけでは絶対だめだと思います。

濱本　学生時代と卒業してからのモチベーションの違いはどこにあるのですか？

正木　学生時代は講義も出ずにラウンジでずっとコーヒーを飲んで、そこを通り過ぎる同級生を呼び止めてはとりとめもない話ばかりしていました（笑）。

私は、卒業時は、年齢が32歳になっていましたので、私自身、研究はあきらめておりました。ただ、縁あって、大学院として生理学の教室に行き、そこで研究を行えたチャンスに巡り合えました。基礎医学講座で、学んでいるうちに、研究が非常に楽しくなってきました。そして、肝がんを題材にして、この楽しいことをもう少し続けてみようかなと思って、19年が経ったわけです。だから、繰り返しになりますが、学生、研修医の皆さんに言いたいことは、チャンスは、いつか、どこかで巡ってくるので、現在どんな苦難の状況にあっても、可能性が無いと思うなということですね。可能性を信じて努力することが、大切だと思いますね。

濱本　今後、一層の努力で新しい内科を作り上げていってくれる教授という風に思います。非常に期待しておりますので、今後ともよろしくお願いします。ありがとうございました。

正木　こちらこそよろしくお願いします。ありがとうございました。

放射線医学講座　西山 佳宏 教授

日時　平成21年５月12日㈫
　　13：00～14：00

濱本　教授になられて１年くらいですけど、いかがでしょうか。

西山　責任が医者だけでなく、医者以外の技師、看護師も含めた放射線部を運営していくことの大変さを感じています。

濱本　学生の印象はいかがでしょうか。先生にとっては母校の学生ですが。

西山　昔とあまり変わっていないと思います。だけど、ポリクリや授業を休む人が昔と比べたら少し多いでしょうか。特にスーポリなんかで休む人がたまにいますね。

濱本　真面目な印象だという意見も多いのですが。

西山　そうですね、昔と比べたら真面目という印象はありますね。僕も真面目なんですけど（笑）。

濱本　先生は学生時代から、真面目に勉強しておられたのですか。

西山　いえ、勉強はあまりしていなかったと思うのですが、授業はあまり休んだことはなかったですね。成績はそんなにできた方ではないですけど。

濱本　卒業して、PETに出会ったことが教授になられる契機となられたのですか。

西山　そうですね、研修で大阪市大に行き、そこにPETがあって、うちにも入ったらいいなと思ってた時があったのですが、あれよあれよという間にPETが入ってきました。

濱本　中四国では初めてだったのですね。

西山　四国には瀬戸大橋など橋が三つもあって、本当に橋が３本要るのかと言われました。PETも同じで四国四県に必要ないかもしれませんが、今は、四国四県、全部入っています。やはり必要です。大学ではなく県中とか、がんセンターに入っているんですけど、やはりまず香川大学に入ったことが影響したのでしょうか。

濱本　今は値段も安価になってきてるのかもわかりませんが、最初の頃に入れたというのは大事ですね。いつ頃、PETは入ったのですか。

西山　2002年です。

濱本　それまでのご専門は何ですか？

西山　それまでは普通の核医学です。

濱本　田邉先生の直系ですね。私は、田邉先生とよく話していたのですが、当時、若くてよく仕事をしている人ということで西山先生の名前をお聞きしました。放射線科に入ったのはどうしてですか？

西山　僕はクラブがラグビー部だったのですが、顧問が田邉先生で、手紙が来たんですよ。君みたいな優秀な学生がほしいと（笑）。で、入りますと言ったんですけど。それだけです。

濱本　今、教授になられましたが、放射線医学に入って全くの迷いはなかったですか？

西山　正木先生と仲がよかったので３内に一緒に入ろうと思っていました。

濱本　お二人とも５期生ですね．５期生から母校の教授が二人出られてすごいことだと思います。今、学生に望まれることは何でしょうか。

西山　香川医科大学の伝統である、讃岐の丘から世界に情報発信、これを学生のうちからしっかり身につけて医者になって大きく羽ばたいてほしいですね。

濱本　同窓会、同窓生に望まれることはどうでしょうか。

西山　香川大学に残ってほしいですね。卒後臨床研修センターの松原先生がＶ字型のカーブをよく描かれるんですが、今、とてもいい状態で、上の先輩方が残って、次も残って、その次も残ってという、そういうふうなサイクルになって

いますので、香川大学でこれが今後も続くように、同窓会としても応援してほしいし、研究面での助成制度なども続けてやっていただきたいと思います。

それから、今は、よくできるお医者さん、臨床医を育てるようなところがちょっとあると思うので、今後は研究が出来て、科研費を獲得できるような先生が少しでも増えてほしいと思います。特に、基礎の先生方が少ないと聞いていますので。

濱本　ここ５年は入局者数はどうですか。

西山　今年は二人ですが、やはり、卒後研修で一時期、大学に残る人が少なかったですよね、あの時は本当にゼロが続きました。このところ、大学に残ってくれる人が多いですから、やっぱり来てくれる人が多くなっています。

濱本　こういう研修システムだと２年間の研修後に基礎に入るのはなかなか難しいかもしれません。僕らの頃は10人以上が基礎に入ったけど、基礎に入らないと学位がとれないといわれて誘われたものです。

西山　末は博士か大臣かと言われて、僕らも卒業する時は大学院に入るものだと思っていました。今、大学院に入る人が減っていますね。

濱本　今はむしろ大学志向よりも専門医志向です。我々の時は大学志向で、とりあえず学位、みたいに言われていたから。時代は変わりましたよね。教育はいかがでしょうか。

西山　教育は範囲が広いですから、医局員全員で取り組んでいきたいと思います。僕が全てわかるかといえばわからないですし、教室員がある程度の専門性がありますから。たとえば胸部中心に、また、頭を中心にとか、学生に、わかりやすい言葉で最先端のことを言うようにはしています。ポリクリを回ってきた際に興味のある学生が多くいますが、それがすぐには入局には結びつかないようです。

濱本　医局員に対しての教育、教室運営についてはどのようにお考えでしょうか。

西山　今、医局員が12人なんですが、もっともっと増やしたいですね。昔は20人以上いました。香川大学出身で放射線科に入って辞めたような人にも戻ってきてほしいです。短期的な教室員の増加で即戦力を上げていく仕方と、長期的に若い先生方を増やすという両方で進めていきたいということを一番考えています。ある程度、柱となる人を何人か作っていって、その柱のもとに若い先生方がまたそうなっていってほしいと思います。

また、今は臨床を十分やっておけばいいかなという雰囲気が強いので、少し、学生の教育とか、論文発表、学会発表、そういう研究的な面もその柱の人々にやっていってほしいなと思います。

濱本　論文を書いてる人はあまりいないのでしょうか？

西山　書いている人もいますけど、全体としてあまり書いていないですね。内科とか外科みたいに試験管を振ったり、一生懸命論文を書いて何かするというのではなく、臨床をしっかりやればいい、あまり論文は書かないところという雰囲気で育ちました。基本はそうとは思うのですが、もう少し、学会発表、論文発表といった形として残るものをしていってほしいと思います。

濱本　それでは、今後の研究の方向性はどのようにお考えですか。

西山　頭の先から足の先まで画像診断、放射線治療はあるので、その方面にすべて目を配られたらいいかと思いますけれど、なかなかできかねます。中央の大病院みたいに、全部超一流になるということは難しいと思うので、得意なところ、「選択」と「集中」みたいな感じでいけたら、そして地方でありながら、ちょっと香川やってるなということができたらいいなと思います。

濱本　私も放射線科に興味をもって、勧誘もされて一時は入ろうかなと悩んだこともありました。私はいつも思うのですが、放射線科医の意義、使命、存在感というのはどういったところでしょうか。各分野の専門家がいるわけで、それをトータルで診ないといけないですよね。

西山　たとえば呼吸器内科の先生は呼吸器の専門で、非常に肺に詳しいのだけども、写ってるところというのが肺だけではなくて、肝臓、心臓、脇の下、乳腺なども写っています。やはり放射線科医の存在というのは、肺だけをみるのではなくて他の臓器に何か病気があるというのを見つけ出すというのが大切だと思います。しかも最近、CTは、倍々ゲームのように1列、２列、４列、８列、16列、32列、64列とすごい列があり、たとえば首から骨盤まで一気に撮れます。専門の分野の先生が限られた領域だけを読む。しかし、他も撮れるのですから、そういうところが我々放射線科の仕事ではないかなと思います。

そして、放射線は、機械の進歩と共にというところがあって、毎年、冬の北米放射線学会で感じることは、この領域の機械の進歩は本当に目を見張ります。

濱本　今、PET診断の意義というのは一番どこにあるのですか。

西山　PETは機能画像で、頭の機能、心臓の機能とか、全身の代謝の絵を見るんですが、PET－CTは、機能画像であるPETと、解剖画像であるCTが一体になってみるようになっています。正確に代謝情報と解剖学的情報が一体になるので、今、PETはPET－CTへと進化しているのが大きな特徴です。また治療効果の判定みたいな、バイオマーカーとしてのPETの役割が出てくると思います。

濱本　常に進化していくわけですから、それに常についていける人材を育てないといけませんね。

西山　フレキシブルな頭をもった人が必要だと思います。

濱本　教授はそれをコーディネートしないといけないわけですね。

西山　診断に限らず治療の進歩もすごく、昔だったら、ガンがあってそこに放射線を当てたらいいという治療だったのですが、今、四方八方から当ててガンを治すとか、コンピューターの進歩にあいまって、どんどん進化しています。肺がんに対しての定位照射というのがありますし。今、大学ではできていないのですが、IMRTは、本当にガンのところだけを狙い撃ちして殺していきます。

濱本　他科とのコミュニケーションが大分要りますよね。

西山　カンファレンスにしっかり出て、同時に診断のフィードバックも重要です。腹部だったら、腹部のカンファレンスに腹部の放射線科の専門家が行きます。それをしないで、僕らが所見だけ書いていたのでは、自己満足みたいになりますからね。

濱本　なるほど、放射線科としての特色がよくわかりました。ますます今後のご活躍に期待しております。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

懇談会だより

球友会（バレーボール部同窓会）

人見　浩史（平成８年卒）

平成21年3月15日（日曜日）高松国際ホテル瀬戸の間において、清元秀泰先生（昭和63年卒）を幹事として球友会が開催されました。球友会は、医学部バレーボール部に在籍した同窓生で構成されており、毎年9月に総会が開催され、現役生とのバレーボールの対抗戦（怪我や筋肉痛と闘いながら）や高松市内で宴席（こちらが主目的）を設けて旧交を温めています。今年は、長年バレーボール部の顧問として尽力頂いた土井昭孚先生の退官の年でもあり、医学科と看護科の卒業生が50名以上参加し、市原新一郎先生（平成3年卒）を準備委員長とし、讃樹會と現役生のサポートのおかげをもって、例年より盛大に開催されました。厳かに始まった会ではありましたが、久方ぶりに拝聴する土井先生の熱のこもった（予想を遙かに超える長さの）特別講演を聞き終える頃には、会の緊張感も程よく解け、大学生時代に戻ったような会話があちらこちらで聞かれるようになりました。小島完治先生（放射線科学：元顧問）や宮内章充先生（昭和62年卒）の挨拶の後、中西源和先生（昭和63年卒）の乾杯のご発声を経て、清元先生の名（迷）司会進行もあり、笑いと雑談と乾杯の声の絶えない会となりました。会の後半では、持ちよった（現存する）当時の写真を見ては往事を偲び、また現役生の余興では大いに盛り上がりました。最後は土井先生の（やはり熱のこもったやや長めの）ご挨拶にて、今年の球友会はお開きとなりました。援助を頂きました讃樹會には大変感謝しております。おかげで、全国に広がる同窓生の活躍を聞くことができ、さらに香川で学ぶ現役生との世代を超えた交流もできました。

22期生同窓会

石川　一朗（平成19年卒）

春寒しだいに緩む3月21日、香川大学医学部医学科22期卒業の面々が細々ながらではありますが香川にて再会がかないました。予定していた人数からは若干の欠席は見られ、同期生諸兄の日々の忙しさを感じる事となりました。

我々22期生がこの時期に同窓会を企画しましたのも、皆様もよくご存知の卒後臨床研修制度の一区切りということで、その打ち上げと今後の進路などについて情報を交換するという目的で実施に至りました。

今回参加をいただいた方とは卒業式以来となる方もおられましたが、2年間の研修を経て実に頼もしくなられたと感じました。また自身の成長は他の皆と比べどうだろうかと考え反省しきりでもありました。

同期の仲間というのは診療科や勤務地は違えども、やはりお互いに刺激し・される関係であり続けたいと思います。ぜひ次回の開催の際にはより多くの同期生のご参加を祈念いたします。

Information

第8回 讃樹會 関東支部会

We　Are！

どなたでも
どこからでも
参加ください(^o^)

皆様、お待たせしました。今年も讃樹會関東支部会を開催します。
支部会もめでたく8回目ということで、今回から「お気軽」な同窓会になる気配が濃厚です。
のれんをくぐって一杯ひっかけにお越しください。

◆お気軽その1◆　**東京駅から徒歩5分の居酒屋**で開催します。

◆お気軽その2◆　しかも会費はなんと**5000円**。

日時：１１月１４日（土）18：30～
場所：隠れ家居酒屋駒八　八重洲店
東京都中央区八重洲 1-8-9　ヤシマビル 2F
TEL　03-3245-9871

※関東支部会員のみなさんにはご案内と返信用ハガキが同封されていますので、出欠を返信下さい。

詳しくは関東支部会HPをチェックして下さい。
http://www.med.kagawa-u.ac.jp/~kantou/osirase.html

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
関東支部会　支部長　江藤誠司
世話人　内藤宗和

近況報告

近況報告

山田　勇（平成３年卒）

諸先輩並びに同級生、後輩のみなさんご無沙汰しております、６期生の山田勇です。

６期生入学時には医大に卒業生は存在しておらず、その後も在学中に卒業生と接するのはもっぱらクラブの先輩方であり、卒後は新しい環境で自分の居場所を探す事に懸命であったり、医大に残りその発展に貢献出来なかった後ろめたさから同窓会活動に協力的でなかった事を後悔しています。まして自分が同窓会誌に寄稿するようになるとは思いもよりませんでしたしその資格も無いように思いますが今回、薬理学西山教授から有り難くも機会を頂き、ここに少しばかりの近況報告と日々の雑感を寄稿させて頂きます。

自分は卒後、199年神戸大学（旧）第一外科に入局（現在は肝胆膵外科及び食道胃腸外科に分局）、いくつかの関連病院を経て1994～1998年神戸大学病理学教室にて学位研究その後再び関連病院へ。最後は民間病院という紆余曲折を経て昨年11年振りに大学病院に戻りました。途中、学位取得にて大学に戻った４年間は院生でしたので病棟では働いておらず正確には大学病院での病棟業務は（研修医以来）17年振りです。病棟が建替えられた事もあり17年ぶりの大学病院はすっかり変わってしまっておりhigh volume centerそのものです。病棟業務は隅々まで細分化（分業化）され、患者へのICは多岐にわたり文書化義務による多量の同意説明書作成、カルテやオーダーシステム等の完全電子化などによる結果、特に研修医業務の大部分がPCのkey boardを叩く事に費やされているようです。また近年の医療情勢の中、経験の少ない研修医に病棟での観血的処置や手術など実際に手技指導できる機会も少なくなっているようです。神戸大学には毎年75人の研修医が採用されますが、そのほとんどが神大卒業生または出身地が神戸市近辺である他大学卒業生です。特別な思いがあり研修病院としての神戸大学を選択したと言うよりは地方大学を卒業し地元に戻るにあたり、京大や阪大に比べ入局後の扱いでの差別が少ないと言うイメージから（実際にその通りですが）選択したと言う事が多いようで病院への帰属意識がやや希薄な印象を受けます（と、言う自分もかつてそんな研修医の1人でした）。また研修医は医局に入局せずに研修を受ける新臨床研修医制度も病院への帰属意識を希薄にしている理由の一つのようです。（今年は募集定員に満たず10人の欠員が生じる事態となっています。）近年の医療情勢の中で大学病院にも独立行政法人化の波が押し寄せ市中病院と同様、経営面がクローズアップされがちですが大学病院（大学医局）の果たす役目の中に高度医療の実践、学術研究活動と並び人材育成（後進の指導）があります。卒後17年経って大学病院に戻る決意をしたのは17年前、優秀さの欠片も無い自分を迎え入れてくれた神戸大学第一外科への恩返しとその人材育成（後進の指導）への思い、そして過去に母校に残りその発展に貢献出来なかった事（特に恩師への感謝を形にする事が未だ出来てない事や母校の後進の指導を出来ずにいる事等々）に対する後悔からです。母校を離れ他大学医局に入局した卒業生は母校に残った卒業生以上に香川医大卒である事を日々気付かされるのかも知れません。それは自分の場合は誇りのようなものでもあり、同時に母校に残らなかった後悔のようなものでもありました。今年度の神大研修医の中に地元（神戸市近辺）出身者であると言う以外の明確な選択理由が無く、帰属意識が希薄で頼るべき先輩も無く、学生時代に想像していた医師のイメージとは違うデスクワーク（PC業務）に追われる研修医がいるなら、僅かながらですがその助力と成ることでせめてもの罪滅ぼしにしたいと思います。幸い母校には正木教授、西山佳宏教授、西山成教授、木下博之教授という母校出身の教授や各教室スタッフとして多くの優秀な諸先輩方もおられ、人材育成にも重点を置いた大学運営に参画されておられるようで母校後進また香川大学を選んでくれた他大学出身の研修医の指導育成に関して聊かの危惧もありません。西山教授の就任式で久しぶりにお会いした恩師からの「人はみな辿り着いた岸で各々頑張るしかない。」「井戸を掘った先人の苦労を忘れてはいけない。」と言う教えと、在学中にある先輩から聞かされた「未だ卒業生が少ないこの香川医大から他大学に入局した卒業生は、先兵として香川医大卒業生の評価を一身に受ける。後からその医局に入局する香川医大の後進の為に研修先に頼るべき先輩もいなくても孤軍奮闘、努力するのだ」と言う話を最近よく思い出します。この年齢で17年ぶりに戻った大学病院は体力的にも精神的にも大変で色々と複雑ですが挫けず後悔の無い日々を送れるように研修医の先生達と同じ目線で一

緒に頑張りたいと思います。まったく笑いが無く面白みも無い内容で西山教授はさぞがっかりしそうですが（笑）初回の寄稿としてはこれで御勘弁頂きたいと思います。最後に香川の在校生、同窓生並びに恩師の先生方また母校を遠く離れた土地で頑張る同窓生の健勝を祈りつつ愚稿を閉じたいと思います。

香川大学医学部から眺める高松市内方面

探検と研究

根間洋明（平成４年卒）

一昨年、滞納した同窓会費を払うべく、16年振りに母校を訪れました。同窓会事務局で支払いを済ませ、「探検部の後輩に会いたいのですが、誰か知りませんか」と尋ねたところ、「一人知っています」と６回生の酒井君に連絡を取って頂きました。その後、懐かしい部室で話をしていると、部員が続々と集まり、顧問の土井先生、私の前の部長だった横井さんまで現れました。それから医大前の居酒屋、土井先生の自宅へと、思いがけず楽しい時間を過ごす事が出来ました。お世話になった事務局の方にお礼申し上げます。

私の近況ですが、医局に属さず、内視鏡医として生きております。ひょんなことから、一人でアスピリン潰瘍の臨床研究を始めたところ、北大の先生に評価して頂き、強い勧めで英文誌に投稿をしました。受理まで３年かかりましたが、Journal of Clinical Gastroenterology という雑誌に載せてもらいました。現在は、アスピリン潰瘍の症例を集めるべく、札幌の禎心会病院という脳神経外科専門病院で、一人で内視鏡をやっております。研究を始めてみると、探検部の骨子である「未知の世界に挑む」精神および地道に進んでいく活動と相通ずるものを感じます。今年の春から、学生時代の探検活動を総括するべく、本を書き始めました。タイトルは、「ごろごろ四国遍路道」です。

以下に、一部ご紹介します。

1987年の春に、自転車で四国一周に挑戦したことがある。当時は、香川大学の一年生で、医学部のある三木町に住んでいた。春休みは、追試験、クラブの合宿で忙しかったが、無事に二年生に上がれることになり、一週間余り、時間の余裕もできた。特に、付き合っている彼女もいない。そこで、自転車で、四国を時計回りに走ってみた。ぐるっと、900㎞。「自分を試してみたい」という気持ちが動機だったと思う。

三木町のアパートを出て、東へ60km程走ると、徳島市に入る。吉野川大橋を渡り、南に50km程走ると、日和佐という、海亀が産卵に来る港町である。初日は、日和佐ユースホステルに泊めてもらった。シーズンオフなのか、宿泊者は、僕も含めて３人だった。次の日は、100kmほど南の室戸岬を目指した。日和佐から、一旦、山道に入るが、10km程で、再び、海沿いの道となり、左手に太平洋が広がって行く。更に20km走ると、高知県との県境があり、そこを越えると、右手から、断崖が国道に迫ってくる。Ｓ字状のカーブになると、断崖の向こうに、次の断崖が見える。はるか、遠くの断崖は、もやがかかって、かすんでいる。自分の顔を左に傾けると、幾重にも重なった断崖が、山並みのようだ。海には、大小の岩が点在して、白波が打ち寄せ、砕け散っている。海沿いの道は、高低差もなく、自転車でも、すいすい進む。速度が増すと、進行方向の断崖がどんどん近づいてくる。ぶつかりそうな錯覚を覚えると、国道が、崖の左下に切れてゆく。断崖をかわしながら、走り抜けていく気分だ。生憎の曇り空だったが、爽快であった。

国道が、突然、北に大きく向きを変えたと思ったら、室戸岬の標識があった。室戸岬は太平洋に突き出ていて、先端まで断崖である。断崖の上に、灯台が立っているはずだが、木が生い茂っていて、下の国道からは、よく見えない。海側の岩礁は、散策路になっている。案内板に、室戸には強い台風が来るので、「台風銀座」と呼ばれると書いてあった。僕の出身地、宮古島も強い台風が来るので台風銀座と呼ばれていた。台風は、フィリピン沖で発生して、北に進み、宮古島付近で、東に曲がるのが一般的だ。そのまま、太平洋を北上した台風が、室戸岬にぶつかるのだろう。ちなみに、僕の生まれた1966年に来た台風が、観測史上最

大の瞬間風速で、気象台の風速計の針が、85m/sのところで、吹き飛んだそうだ。100m/s以上はあったろうというのが、島の通説である。家という家が吹き飛んだらしい。台風銀座と聞いて、なんとなく親近感が湧く。

灯台の近くには、最御崎寺（ほつみさきじ）という寺があり、宿坊が、ユースホステルを兼ねていた。室戸スカイラインと名付けられた道路を登っていくと、寺の宿坊があった。翌朝、灯台の展望台から朝日を見ようと思い立ち、早起きしてみた。薄闇の中、宿坊の裏口を出ると、寺の境内に通じている。灯台までは、寺の境内を通っていけば良いと、寺の方が教えてくれた。宿坊から一直線に山門があり、山門をくぐると、50m程先の海側に、白い灯台がある。灯台からは、水平線が見渡せたが、残念なことに、曇っていて、日の出は拝めそうになかった。引き返すと、山門が、朝もやの中に、黒く浮かび上がっていた。正面から見ると、門の左手前に、笠をかぶり、杖を持ったお坊さんの銅像が立っていて、門の下、左右の空間には、朱色の仁王像の胴の部分が見えた。門柱に、板が打たれていて、四国廿四番霊場真言宗豊山派東寺最御崎寺と墨で書いてあった。灯台の方を振り返ると、小さな表札が目に入った。上方向と左方向に矢印があり、上は灯台、左は23番まで83ｋｍとある。左矢印の先を見ると、林の中に降りてゆく石段があった。石段を少し下ってみると、木の向こうに海が見える。何故か、このまま、石段を降りて行きたいという衝動にかられた。山門に戻り、正面に立つと、また、墨の文字が目に入った。薄暗い、山門の四角い空間が、異次元への入り口のようだった

八日間かけ、徳島、高知、愛媛、香川と、四国をぐるっと回ったが、晴れた日は一日もなく、最後の日は、午後から豪雨となった。夕闇の中、自分の部屋を目指して、ずぶ濡れで自転車をこぎ続けた。三木町のアパートの隣には、「みき」という喫茶があったが、その看板の光が見えると、右手が、自然に自転車のハンドルを離れ、拳が、灰色の雨空に突き上がった。「やった！」と叫んでいた。部屋のドアを開けながら、「日本一周できるかも」と思った。体にまとわり付く濡れた服を脱いで、洗濯機に放り込む頃には、「よし、やろう！やるしかない！」と、思いつきが、決心に変わっていた。一年の秋に探検部の部長を任されたが、誰が見ても、まだ心許なく、夏は、北アルプスで、前部長の特訓を受けることになっていた。今度の夏は、山登りで忙しいから、やるとしたら、三年の夏だな。満足感に浸りながら、湯船につかっていると、ふと、最御崎寺の山門が蘇ってきた。自転車で走っている間も、不思議と、頭の隅から離れなかった。自転車で日本一周に成功したら、他の八十七の寺も見てみるか。車は持っていないから、回るとしたら、また、自転車かな。でも、日本一周の後だとつまらないかもしれないな。あれこれ考えていると、突然、「ローラースケート！」という言葉が口をついて出た。これだ。僕は、湯船を飛び出して、濡れたまま、畳の上をぐるぐる歩きまわり、「ローラースケート、ローラースケート」と呟いた。アパートの外では、雷がごろごろ鳴っていた。

写真左・2008年度探検部OB会より、集合写真。
筆者は前列中央土井先生の後ろに立っております。
この日は、29年顧問を務められた、土井先生から、脳神経生物学中村丈洋先生への引継ぎも兼ね、盛会となりました。

写真下・2008年度探検部OB会より、86年北アルプス遠征メンバー整列写真。
私は、前から4番目です

PHOTO

「　平成21年度卒業生（24期生）巣立ちの日　－３月24日－　」

讃樹會を代表して
西山先生から記念品を贈呈

Outstanding of teacher
２度目受賞の村主先生

新入生歓迎行事を終えて

新入生歓迎行事実行委員会委員長
山口智也

本学で入学式を終えて医学部キャンパスに続々と新入生到着

WBCで日本代表が驚異的な粘りと不屈の精神力を持って、連覇を成し遂げた2009年、春。香川大学医学部に医学科100人、看護学科60人、看護学科３年時編入生10人、計170人もの新しい仲間が加わりました。私たちは彼らがやってくるのを心待ちにし、あたたかく迎えるため長い間準備をしてきました。

香川大学医学部の新入生の迎え方は少し変わっています。他の大学、学部でも大なり小なり新入生歓迎行事というものが存在しますが、香川大学医学部のそれは規模が大きく、２年生全員が何かしら携わるという、学部全体をあげてのものであります。

香川大学医学部には新入生歓迎実行委員会というものが存在します。これは入学して間もない新入生が１日でも早く学生生活に慣れるよう、２年生が中心になって新入生のお世話をするということを目的として、様々な行事を企画、運営していく団体です。その行事はというと、３日間のSG班単位での活動、講演会、新入生歓迎パーティー、SG班対抗バレーボール大会、サークル勧誘、サークル紹介が挙げられます。

ここでSGという聞き慣れない言葉に注目した方も多いと思います。SGとはスモールグループの略で、このグループ単位で新歓活動をすることになります。SG班単位でご飯に行ったり遊びに行ったりする機会が多くあるため、交友関係を築くきっかけになります。は

たくさんのサークル紹介のチラシを手にガイダンスへ向かう

た目から見ると30人近くもの男女が一緒にごはんを食べたり遊んだりしている光景はまるで規模の大きい合コンのように見られてしまうかもしれませんが、あくまで清く正しい男女の友情関係を育むものであり、それ以上でもそれ以下でもありません。

ただ一方でこのSG活動での出会いがきっかけとなって、後にカップルが誕生するというケースも珍しくありません。何はともあれ、このSG活動とは後の学生生活にまで深く関わる重要な要素であることは間違いありません。

山口智也委員長

こうして３日間のSG活動が終わった後に今度はサークルの勧誘が始まります。それに際して、例年、各サークルの雰囲気を知ってもらうために、サークル紹介というイベントを新歓実行委員会が企画しています。従来、各サークルは１～２分程度の自由時間を与えられ、新入生を前にして、各サークルの特徴を盛り込んだパフォーマンスをする、というのが常でした。例えば弓道部であれば、新入生の目の前で米俵を置いて、それを的にして弓を射たり、バレー部であれば実際にボールを使ってトスをしたり、という具合です。ところが今年になって、「昨年までのやり方では時間がかかる割には新入生にサークルの特徴が伝わらない。上級生の自己満足

入学初日で緊張する新入生

今年から始まったビデオによるサークル紹介は見応えあり、笑いあり。

で終わっているのではないか」という意見を学務の方々、先生方から頂き、サークル紹介の新しいあり方を考えることとなりました。従来より短い時間で、そしてより有効にそのサークルの特徴を伝えられる方法。サークル局長が中心となって考えたところ、それを満たす方法として、我々は各サークルに40秒程度という制限の中で紹介ビデオを作成していただくこととなりました。

昨年までのやり方からの大幅な変更のため、先輩方からの抗議の声が殺到することが懸念されましたが、それは

杞憂に終わりました。やはり先輩たちも私たちと同様に新入生歓迎行事を経験したわけであり、新入生が香川大学医学部に少しでも早く馴染むために協力するという新歓実行委員会のモットーを共有した良き理解者に他なりませんでした。

この他、今年は新歓行事の日程が変則的であったため、新入生歓迎パーティーの内容を大幅に変更する必要があるなど、多くの問題に直面しましたが、各局局長が主体的に問題に立ち向かってくれたため、どの行事も順調に消化することができました。

ただ１つだけ、私たちの手ではどうすることもできなかったことがあります。それはスポンサー収入の“激減”でした。

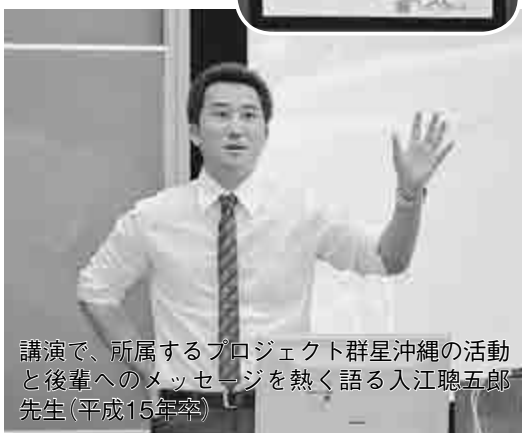
昨年、突如として全世界に大不況の嵐が吹き荒れ、至るところでその影響がみられました。ファストフード店が一人勝ちというニュースが新聞の一面を飾るという状況のなか、スポンサー契約は難航を極めました。昨年まではスポンサー契約をしていただいていた多くの企業、店舗が不況のためスポンサー契約に消極的になり、我々はなすすべもなく日が過ぎるのをただただ感じているだけでした。結局、大幅な赤字を強いられることとなりましたが、先代の新歓実行委員会の方々が積み立ててくださってきた繰越金に助けられ、計画通りに運営をすることができました。

いくつかの輪になって、熱心にサークル勧誘

講演に聴き入る新入生

私がこの新歓行事を経ていく上で感じたことがあります。もし自分たちが１つ下の学年にいいことができれば、１つ下の学年もまた下の学年によくしてあげようと考えます。そしてこれがいつか間接的に数年下の学年にまでいい影響を及ぼすことになるのです。このような正の連鎖がいつか伝統となり、独自の校風が形成されていくのでしょう。

香川大学医学部のいいところは、学生同士の関係が、学年の垣根を越えて、密であるというところだと思います。試験前には試験対策委員なるものが発足し、「みんなで乗り越えよう」をモットーに、協力して試験対策に取り組む姿が見られます。こうした姿勢が医師国家試験並びに看護師・保健師国家試験における香川大学医学部の学生の高い合格率の理由の１つなのだと思います。そしてさらに元をたどれば、この新入生歓迎行事こそ、私たち学生が初めてこのような仲間意識を養成する場であるのだと思います。


講演で、所属するプロジェクト群星沖縄の活動と後輩へのメッセージを熱く語る入江聰五郎先生（平成15年卒）

私たちはこの伝統から与えられる利益を享受するだけではなりません。この伝統が時代にあった形で後世にも受け継がれていくよう努力せねばなりません。当然それを実現させるのは決して容易なことではありません。スポンサーに資金援助をしていただくことも不可欠ですし、先生方や事務の方々にその他諸々の援助をしていただけなければ実現は不可能であると言えるでしょう。後輩たちにはどんな逆境にあっても負けない強い想い、そして、周りの支えてくれている人たちに感謝をもって、この良き伝統を受け継いでいってくれることを切に願います。

最後になりましたが、新入生歓迎行事に際してご協力いただきました多くの皆様に心より感謝し、御礼申し上げます。そして共通の目標に向かって、時にともに笑い、時にともに頭を悩ませた仲間へ。ありがとう。

ニュースの窓

「香川総合医療教育研究コンソーシアム」発足　@2009・2・5

香川県内の医療系学部を有する国公私の三大学の連携により、香川県の医療に関する知の拠点を形成し、地域に密着したチーム医療を実践できる高度な医療人を養成する「香川総合医療教育研究コンソーシアム」が構築されました。

具体的には、学部共同授業による総合医療の早期教育、大学院共同授業による総合医療専門職の養成、従来の共同研究に加え新規学際領域研究の推進、医師会・薬剤師会・看護協会・臨床検査技師会・臨床工学技師会・自治体との協力による現役医療人に対するリカレント教育、などが行われます。

２月５日に、三大学の教職員・学生、県下の医療機関、関連自治体からおよそ100名の参加のもと、全日空ホテルクレメント高松で第１回フォーラム、引き続き交流会が開催され、無事にスタートを切りました。

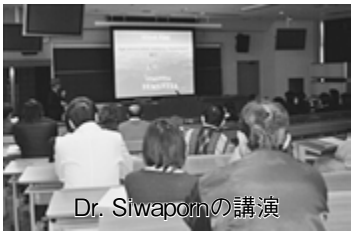
チェンマイ大学医学部が来学　@2009・3・26／3・31

全体会議。Dr. Siwaporn（前列中央）と訪問団（後列左側）

本学が、東南アジアの中核拠点として位置づけ積極的な国際交流を展開しているタイのチェンマイ大学から、交流協定締結を視野に入れ、初めて香川大学医学部へ正式訪問がありました。

訪日したのは、Dr. Siwaporn（＝チェンマイ大学医学部学長）夫妻、医師１名、看護師７名の10名で、３月26日来日の翌日から帰国の途についた31日までに、公式行事として医学部長、病院長を始めとする香川大学医学部との全体会議、病院見学、メディカル・サイエンス・セミナーではDr. Siwapornの講演が行われました。

附属病院見学



Dr. Siwapornの講演

27日の夕刻には、派遣団の歓迎会を兼ねて「国際交流の集い」が開催され、医学部の留学生やその家族、教職員、学生が一堂に会し、交流を深めました。公式行事の間を縫うように、土日を利用して金毘羅詣り、瀬戸大橋公園、仏閣巡り、栗林公園、屋島、大型ショッピングセンター等を案内し、両日ともに学生ボランティアが大いに“観光大使”として活躍しました。キャンパス内の茶道部、空手部、弓道部を訪れ学生の部活動を通して日本の文化に触れる機会もありました。

茶道部

弓道部

帰国を翌日に控え、市内で設けられたFarewell Partyでは、来日中の様々なスナップ写真のスライドショーが上映される中、今回の訪日を振り返りつつ今後の更なる友好関係を確認しました。

国際交流の集い

2009年度海外派遣事業報告会で成果を発表　@2009･6･29

医学部国際交流委員会主催で、2009年度の海外学生派遣事業報告会が開催されました。

新型インフルエンザの影響により海外留学は早い段階から中止が決定したため、2009年度の学生派遣は、ニューキャッスル･アポン･タイン大学に留学した真嶋允人さん（６年）、鈴木裕美さん（６年）、及び同校とロンドン大学セントジョージ医学校の２校に留学した川久保充裕さん（６年）の３名に限定されましたが、三人三様に得るところの大きい留学であったことが伝わる報告会となりました。

～海外臨床研修を目指す学生・医師のためのセミナー～

伴　信太郎先生講演会開催　@2009･7･10

「私が若い人達の国際交流を応援する理由（わけ）」という演題で、名古屋大学医学部附属病院総合診療部教授、日米医学医療交流財団専務理事、日本医学教育学会長の伴信太郎先生による講演が、臨床講義棟で行われました。

レジデントで留学した際の苦労した経験から、海外留学を希望する人の応援を続けておられるというご自身の活動の所以を織り交ぜて語っていただき、留学の『光』だけではなく、『影』の部分も含めて支援を惜しまない活動のお話に、参加者は熱心に聞き入りました。講演後、学生食堂で、伴先生を囲んだ懇親会が開催されました。

国際交流委員会発信／サテライトセミナー「学生の国際活動」報告会　@2009･7･11

これまで行なってきた、または現在進行中の国際交流活動や、USMLEの勉強などについての報告会が、司会進行発表全て英語で行われました。県内病院勤務の卒業生の藤岡研先生は「アメリカでの研修に向けて」というテーマで参加し、ブルネイ大学の研修にあえて２回挑戦した鈴井泉さん（４年）、USMLE勉強会を立ち上げ日々研鑽に励む鏑木直人さん（５年）、川久保充裕さん（６年）の発表がありました。

糖尿病プロジェクト“チーム香川”KICK OFF　@2009･7･20

香川県、県医師会及び香川大学附属病院を中心とするＩＴで連携した糖尿病関連疾患に対するプロジェクトがスタートしました。

糖尿病克服プロジェクト「チーム香川」は、香川大学における医療ＩＴ技術等をベースにし、香川大学、香川県、香川県医師会及び地域医療機関が連携し、個々の地域医療機関に散在する患者の医療情報を共有し集約することで膨大なデータ蓄積を可能にし、全県一体となって治療に取り組むことで、地域住民の糖尿病患者数の減少及び予後の改善を図るものです。

同事業は、香川県民一人ひとりの健康への意識を高め、糖尿病疾患の克服を目的として発足したもので、事業の活動実績等を広く社会に提言することも使命としています。

７月17日の県庁における記者発表に続き、７月20日には、祝日で賑わう市中心部の丸亀町壱番街前三町ドーム広場において第一回目の住民啓蒙イベントが行われました。ＷＥＢサイトの体験、パネル展示、血糖値・血圧・体脂肪の測定、骨盤のゆがみチェックとエクササイズ指導等が行われ、多くの市民の方々の参加がありました。

尚、このプロジェクトには同窓である、横井英人教授（医療情報）、西山　成教授（薬理学）、村尾考児講師（内分泌代謝･血液・免疫・呼吸器内科学）などが参加しています。

********　********　********

糖尿病克服プロジェクトHPはこちらまで。↓

http://test.hertz.ne.jp/TEST/bc-kagawa/index.html

チェンマイ大学Dr. Siwapornを先頭に、踊りのパフォーマンスで歓迎に応える訪問団。この後、会場の大勢が参加して踊りの輪が大きく広がった。（３月27日･国際交流の集いから）

求人募集

平成元年卒、４期生の田中あゆみと申します。

現在私が常勤医として勤務しております医療法人「あさぎり病院」では、産婦人科常勤医を募集しております。

あさぎり病院は産婦人科、眼科、総合診療科内科、総合診療科外科からなっている急性期病院で一般病床99床の日本医療機能評価認定病院です。基本理念は「人にやさしい医療をめざして」です。

産婦人科では年間1000件を超える分娩を扱っており、ＮＩＣＵはないので35週未満の早産や多胎等のハイリスク妊娠は紹介していますが、豊富な症例があります。

また婦人科も悪性疾患は同市内の兵庫県立がんセンターへ紹介しておりますが、筋腫の膣式手術や卵巣のう腫などの腹腔鏡下手術や性器脱に対するメッシュ手術等積極的に行っており、大変やりがいのある職場となっています。

現在常勤医は私を含め５人いますが、私が一番年下と、ちょっと高齢化にさしかかっており、40歳前後のやる気のある若い先生に是非きていただきたいと願っております。

経験年数は問いません。待遇に関しては申し分ない条件が整っています。

私自身、出産を機に院内保育所があり、24時間、病児保育もお願いできるというところに惹かれて就職させていただきました。今年８月から保育所が病院のすぐ近くに移転し、しかも隣接して小児科クリニック（子育て中の常勤小児科女医２名）もできました。

もちろん男性医師も歓迎です。当院は私立なので、頑張ったものには頑張っただけの報酬がいただけます。

ただ昨今の産婦人科医不足とお産から遠ざかって不妊クリニックへとながれていく傾向から、なかなか人材があつまりません。そこで、我が母校に明石の地でやってみたいと思ってくれる後輩はいないかと、求人募集をさせていただきたいと思った次第です。当院のホームページのアドレスを是非一度ごらんください。　http://www.asagiri-hp.or.jp/

〒673-0852
兵庫県明石市朝霧台1120-2
TEL：078-912-7575　FAX：078-913-6763
E-mail：a-tanaka@asagiri-hp.or.jp
医療法人吉徳会　あさぎり病院　産婦人科
田中　あゆみ

事務局からのお知らせ

TEL/FAX　087-840-2291　　E-mail　dousou@med.kagawa-u.ac.jp
http://www.kms.ac.jp/~dousou/

会員情報の確認と異動連絡のお願い

・同封の会員情報をご確認いただき、変更がありましたらご連絡下さい。連絡方法は、「異動届」、メールのいずれでも結構です。
・当面は会員名簿の作成は予定しておりませんが、異動につきましては必ずお知らせ下さい。
・お知らせいただいた異動は、同窓会の最新の会員情報であるだけでなく、大学から勤務先状況等の統計資料作成の依頼や、部活動からＯＢの連絡先の問い合わせなどに対する貴重な情報源となります。
・同窓会会員の個人情報につきましては、「讃樹會個人情報取扱に関する基本方針」に基づいた管理を行いますのでご協力をお願いします。

電話詐欺情報（最新事例紹介）

応対の鉄則
「すぐに教えない、勝手に教えない」

・同期の友人を騙り結婚の報告をしたいという理由で実家から携帯電話番号を聞きだされ、それから非通知で電話が掛かり始めた。怪しいので出ずにいたら、ある日、勤務先病院の電話窓口を突破して、病院用PHSにかかってきた。「香川小児病院　麻酔科の○○だが、今回、讃樹會の役に就いたので挨拶の連絡をしている。あなたは、異動連絡をされていないので、新しい住所を伺いたい。」と言ってきた。不審であったため何も教えず、「また後ほど連絡します」と電話を切った。（2009年４月）
・本年卒業の研修医の実家に、讃樹會を名乗り、異動連絡の返信用はがきが戻らないので連絡先を教えるようにと電話があった。（2009年６月）→　**讃樹會から返信用はがきは送っていませんのでご注意下さい。**

讃樹會ドクター総合補償制度（医療損害賠償保険）加入のおすすめ

・年間を通じて加入いただけます。入会金や年会費不要で保険料のみです。転勤時の加入変更が不要です。自己免責（自己負担）はありません。団体割引適用ですので加入者が増えることで割引率が上がります。現在、割引率10％を達成しました。あと数名で15％割引に届きます。ぜひ、ご検討下さい。お問い合わせは事務局まで。

診療科だより　香川大学医学部附属病院東病棟　２階　小児外科

小児外科
－こどもたちの未来のために

香川大学医学部小児外科
科長　野田卓男

讃樹會の皆様、母校に小児外科という診療科があるのを覚えてくださっているでしょうか。

私が科長になり９ヵ月が過ぎました。今年は５年ぶりに本学卒業生の新入局があり教室が活気づいています。小児外科は一言でいえば“小児の一般外科”で、体幹の臓器のほとんどを対象として手術を行いますので、多くの診療科の先生方にも協力いただき診療を行っています。

我々は“こどもたちに未来を、やさしい診療そしてハンディキャップを残さない手術を”のテーマを掲げ、技術とハートを磨いています。体重 400gほどの超未熟児から、50kg超の中学生まで、体格、生理の極端に違う患児を対象とします。そして、小児外科は良性疾患が主体で、例えば、先天的な疾患に対し“矯正する”、“機能を付加する”、“変更する”という目的で手術を行うので、手術技量の良し悪しで結果に差が出てしまうことが多いかもしれません。そのため、手術の基本手技のトレーニングは勿論、マイクロサージェリーや鏡視下手術のトレーニングも欠かせません。糸結びに始まり、学生のOSCEに使用する器具での縫合の練習、鏡視下手術の練習用ボックスなどのほか、頭の中でのイメージトレーニング（医龍というTVドラマでは上半身裸でやってましたが）も役立つと思います。

小児外科疾患の患児は絶対数も少ないため、一人一人を大切にし一人の患児からより多くのことを学ぶため、毎朝８時からカンファレンスを欠かすことなく行っています。外来は、月・水・金曜日で、火・木曜日は手術日です。最近は地域連携室を通して初診の患者さんをご紹介いただくことが増え、少し待ち時間が減りつつあります。手術日も外来ができればよいのですが、マンパワー不足のためご迷惑をおかけしています。入院は東病棟２階で、小児外科では長期入院は少ないのですが、短期間で入退院するため、看護師さんの負担は結構大きく迷惑をかけています。小児科医は注射や採血でこどもに嫌われますが、小児外科医は注射も採血もし、さらに手術までして嫌われています。“やさしい診療”と言いながらこどもの嫌がることばかりし、やさしい看護師さんは心を鬼にしてこどもに馬乗りになり“早く処置を済ませてよ！”と、やさしい眼差しを向けてくれます。外来、東病棟２階には、いつも子供たちの泣き声が将来の日本の叫びとなって響いています。少子高齢化のため、老人医療に多くの注目（お金）が集まっていますが、今のこどもの数以上に将来の成人・老人は増えないはずですので、我々は未来の日本人を減らさないように奮闘しているといえます。

教室では、以前から“胆道拡張症”、“外科侵襲と栄養”、“腸管不全”をテーマに研究を行っており、現在は少ないマンパワーで“小腸粘膜の再生”に取り組んでいます。研究は大学に課せられた義務であり、また特権でもありますので、細々でも何とか絶やさず頑張っていますが、やはりもっと医局員が増えてほしいと願っています。

こどもが大好きな方、大人になりきれていないと思う方、学生時代に小児外科に興味を持てなかった方、いや、私は手術で勝負したいと思う方、そして、どなたでも同窓の先生方、ぜひ一度我々の教室に足を運んでみてください。

とめどもない紹介文で申し訳ありません。今後ともぜひご支援ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。